

篠山市

# 東中道ノ坪遺跡

(主)西脇篠山線緊急地方道整備事業に伴う発掘調査報告書

2002年12月

兵庫県教育委員会

篠山市

# 東中道ノ坪遺跡

(主)西脇篠山線緊急地方道整備事業に伴う発掘調査報告書



2002年12月

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県篠山市東吹に所在する「東中道ノ坪遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土品整理作業は、兵庫県丹波県民局柏原土木事務所（発掘調査時は兵庫県柏原土木事務所）の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 確認調査は平成9年度に実施した。担当者は兵庫県教育委員会の矢野治巳である。全面調査は平成10年度に実施し、兵庫県教育委員会の鈴木敬二と牛谷好伸（現、滋賀県長浜市教育委員会）が担当した。
4. 全面調査は上山建設株式会社が工事を請け負い、空中写真測量は富士測量株式会社に委託した。
5. 調査現場での遺構実測・写真撮影は各調査員が担当した。また全面調査では補助員として谷後恒美氏が、また室内作業員として高橋美千代氏が参加した。
6. 出土品整理作業は平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。遺物写真の撮影は株式会社イーストマンに委託した。
7. 本書で使用した方位は、日本測地系による国土座標を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。
8. 本書で使用する遺構名はアルファベットによる略号で表記する。略号は以下のとおりである。  
S B：据立柱建物　　S D：溝　　S K：土坑・井戸　　P：ピット
9. 本書に掲載した図版のうち、遺構分布図には国土地理院発行2万5千分の1地形図「篠山」図幅を使用した。個別遺構図については、空中写真測量図ならびに現地で調査員等が実測した図面をもとに作成した。
10. 本書の編集・作成は鈴木敬二が岡田美穂の補助を得て実施した。
11. 本報告にかかる出土遺物ならびに記録写真・関係書類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所または同事務所の魚住分館において保管している。

# 本文目次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2

## 第2章 位置と環境

第1節 遺跡の立地	3
第2節 周辺の遺跡	3

## 第3章 調査成果の概要

第1節 概要	5
第2節 A地区	5
第3節 B地区	5
第4節 C地区	6
第5節 D地区	6
第6節 E地区	6

## 第4章 遺構

第1節 第1遺構面	7
第2節 第2遺構面	8

## 第5章 出土遺物

第1節 第1遺構面出土土器	10
第2節 第2遺構面出土土器	12
第3節 第2遺構面出土木器	16

## 第6章 まとめ

18

# 挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の中世遺跡等	4
--------------------	---

# 表目次

表1 出土遺物法量表	17
------------	----

## 図版目次

- 図版1 調査区配置図
- 図版2 土層断面図（各調査区南壁）
- 図版3 A・B地区 全体図
- 図版4 C地区 全体図
- 図版5 D・E地区 全体図
- 図版6 遺構図（第1遺構面 土坑）
- 図版7 遺構図（第1遺構面 土坑）
- 図版8 遺構図（第1遺構面 土坑、溝）
- 図版9 遺構図（第2遺構面 土坑）
- 図版10 遺構図（第2遺構面 土坑、溝）
- 図版11 遺構図（第2遺構面 捩立柱建物）
- 図版12 遺構図（第2遺構面 捩立柱建物）
- 図版13 土器（第1遺構面 土坑、溝、柱穴）
- 図版14 土器（第2遺構面 土坑、溝等）
- 図版15 土器（第1遺構面 包含層 第2遺構面 柱穴および包含層）
- 図版16 SK205出土曲物（上段）
- 図版17 SK205出土曲物（下段）

## 写真図版目次

- 写真図版1 （上）A～D地区、第2遺構面全景（西から） （下）同（東から）
- 写真図版2 （上）A地区、第1遺構面全景（西から） （下）A地区、第2遺構面全景（西から）
- 写真図版3 （上）B地区、第1遺構面全景（西から） （下）B地区、第2遺構面全景（東から）
- 写真図版4 （上）C地区、第1遺構面全景（西から） （下）C地区、第2遺構面全景（東から）
- 写真図版5 （上）D地区、第1遺構面全景（西から） （下）D地区、第2遺構面全景（西から）
- 写真図版6 （上）E地区、第1遺構面全景（西から） （下）E地区、第2遺構面全景（西から）
- 写真図版7 （上）C地区西端部、遺構検出状況（東から） （下）SB203、全景（東から）
- 写真図版8 （上）SK210（西から） （中）SK205（南から） （下）土器だまり（南から）
- 写真図版9 （上）P.2111上器検出状況（南から） （中）SK202土器検出状況（南西から）  
（下）SK209土器検出状況（南から）
- 写真図版10 出土遺物① 土器
- 写真図版11 出土遺物② 土器
- 写真図版12 出土遺物③ 土器
- 写真図版13 出土遺物④ 土器 （上）SD108出土土器 （中）SD104出土土器 （下）SD222出土土器
- 写真図版14 出土遺物⑤ SD205出土 井戸側転用曲物（上段）
- 写真図版15 出土遺物⑥ SD205出土 井戸側転用曲物（下段）

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査にいたる経緯

主要地方道西脇篠山線の当該区間は西脇市と篠山市を結ぶ県道であるが、調査を実施した箇所付近は篠山の市街地と国道176号線をむすぶ重要な路線である。にもかかわらず道路改良以前の状況は道幅約5mで、自動車のすれ違いが困難な状況であった。この状況を改善するため（主）西脇篠山線緊急地方道整備事業が計画された。

当該事業範囲（西吹～東吹）の区間について、兵庫県埋蔵文化財調査事務所が平成9年4月に埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、東吹周辺において中世の土器を中心とする遺物の散布が確認された。これにより兵庫県教育委員会は、兵庫県柏原土木事務所（当時）の依頼に基づき、確認調査を平成9年9月・10月に実施した。その結果、須恵器・土師器等の土器片および丹波焼等の陶器片を検出するとともに、中世の建物跡を検出するなどの成果をあげた。この結果に基づき兵庫県教育委員会は、兵庫県柏原土木事務所（当時）からの依頼に基づき平成10年8月から埋蔵文化財の全面調査に着手した。

## 第2節 調査の経過

### 1. 確認調査（実施日：平成9年9月16日および10月8日 遺跡調査番号=970309）

兵庫県柏原土木事務所（当時）からの依頼に基づき、事業地内の埋蔵文化財の有無を確認するための確認調査を実施した。調査対象範囲のほぼ全域で須恵器・土師器等の土器片および丹波焼等の陶器片を検出するとともに、中世の建物跡を検出した。なお調査対象範囲の東西両外側へ向けては遺構・遺物の密度が極端に薄くなっていくことと、現地形での標高が徐々に下がっていくことなどから、遺跡が立地するには不適であるとして、全面調査の対象からは除外した。

《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 上田 熊

（調整事務）企画調整班 主任調査専門員 輔老拓治 技術職員 鈴木敬二

（調査担当）企画調整班 事務職員 矢野治巳

### 2. 全面調査（期間：平成10年8月11日～10月22日 遺跡調査番号=980111）

全面調査の対象は、現道の拡幅範囲981m<sup>2</sup>とした。調査実施の際、現代の表土・床土は掘削用重機で除去し、さらに下方の遺物包含層を人力で掘削した。遺構面に達した時点で人力による精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。調査開始時の想定とは異なり、調査の最中に遺構面が2面あることが判明した。このため人力による掘削を二度実施した。

検査した遺構の記録は、写真撮影と実測により実施した。これらの作業は空中写真撮影および測量を実施したが、先述のとおり当初遺構面は一面という想定であったため、第2遺構面のみ空中写真撮影および測量を実施した。第1遺構面および第2遺構面において、人力による実測と足場からの全景写真撮影を実施した。

《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

(調整事務) 全面調整班 調査専門員 山本三郎 技術職員 柏原正民  
(調査担当) 調査第3班 主任 鈴木敬二 技術職員 牛谷好伸〔臨時の任用職員〕

### 第3節 整理作業の経過

出土品整理作業のうち、出土土器の洗浄・注記については発掘調査実施中に実施した。本格的な整理作業は平成14年度に埋蔵文化財調査事務所において実施した。作業内容は、遺物の接合補強・実測・製図・報告書編集等である。

《調査体制》 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所  
所長 藤本修三  
(整理担当) 整理保存班 調査専門員 池田正男 主査 菊田淳子  
調査第3班 主査 鈴木敬二  
嘱託員 岡田美穂

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の立地

遺跡の所在する篠山市東吹（調査時は多紀郡丹南町東吹）は、篠山盆地に立地しており、標高はおよそ200mである。旧丹南町内において、篠山盆地は氷上低地とともに丹波低地を構成している（円増 1994年）。遺跡の北方には加古川水系の篠山川が東から西に流れている。東中道ノ坪遺跡は、この篠山川南岸の段丘上に位置している。遺跡の南方には、中世後期に吹城が築城された東城山が存在する。東城山のような丘陵が丹波低地には点在し、そのような丘陵の多くに戦国期の山城が築造された。

（参考文献）

円増 繁「第1章 丹南町の地形・地質・気象」『丹南町史』1994年

### 第2節 周辺の遺跡

東中道ノ坪遺跡が所在する地域の字名は「東吹」と呼ばれている。この地域が「吹莊」と呼ばれていたことが、篠山藩記録に挿り「多紀郡志」に書かれている（細見 1980年）。細見氏によると吹莊と呼ばれた一帯が12世紀頃には成勝寺領の福貴御園にあたり、かつ、成勝寺領はのちに六藤寺領としてまとめられた皇室領で、大覺寺領に伝領されたので、福貴御園もそのようになったと推測している。

また東中道ノ坪遺跡の周辺には中世後期（戦国時代）の山城が数多く存在する地域である。天正期に、織田信長の命を受けた明智光秀が丹波に侵攻するが、その際の攻める明智方の城と、地元の八上城に根拠を置く波多野氏鶴の城とが混在するような状況を呈している。

遺跡分布図に示したとおり、遊谷城跡、藤井館跡、西吹城跡、網掛城跡、吹城跡、吹出城跡、岩崎城跡、谷山城跡が存在する。

西吹城は、創建年代は不明で、創築者は難波佐渡守とされる。難波佐渡守は多紀郡内において早くから勢力を持っていたとされる。

網掛城は、天正5年（1577年）に明智光秀が築城した山城である。明智光秀は天正6年、吹城攻撃のために網掛に急進築城したとされる。

吹城は、享禄年中（1528～1532年）に創建された山城である。創築者は井闇五郎左衛門秀次である。吹城の井闇氏は、西吹城の難波氏らと連携して八上城の西の防備の拠点をなしていた。これらの防備網は明智光秀軍の攻撃を受け、天正6年（1578年）に落城した。

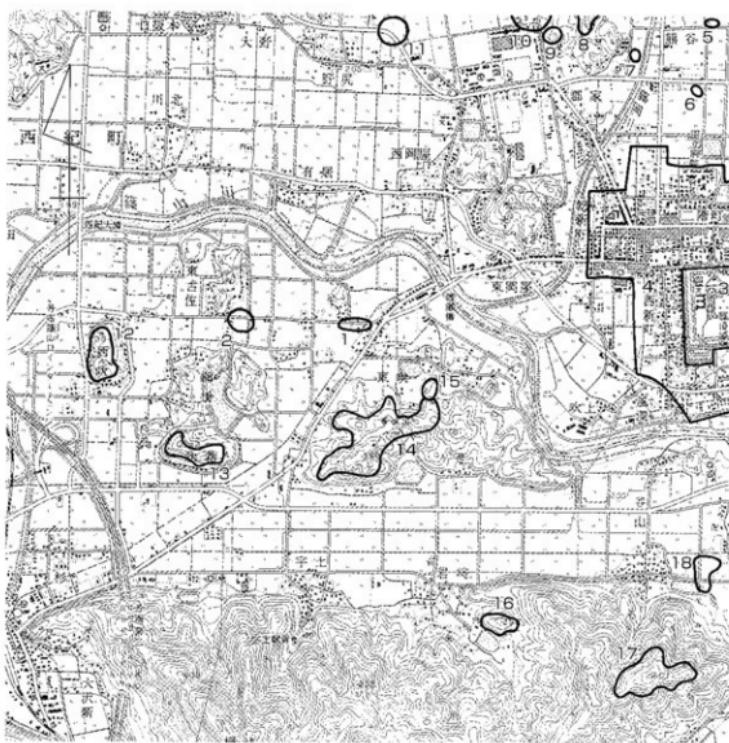
岩崎城は元亀年中に柳原左近兵衛により創築された。柳原氏は波多野氏に属していた土豪と考えられる。

谷山城は、戦国時代末期に平林大膳秀衡によって築城された。平林家は波多野家の老中とされる。なお、城郭に関する記事は兵庫県教育委員会編『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』（兵庫県教育委員会編1982年）を参考にした。

（参考文献）

兵庫県教育委員会編『兵庫県の中世城館・莊園遺跡－兵庫県中世城館・莊園遺跡緊急調査報告』1982年

細見末雄「丹波国都城別荘園」『丹波の莊園』1980年5月



第1図：遺跡の位置と周辺の中世遺跡等（縮尺=1:25,000）

- |                 |                   |                |
|-----------------|-------------------|----------------|
| 1. 東中道ノ坪遺跡（集落）  | 2. 西古佐遺跡（集落）      | 3. 史跡篠山城跡（城館跡） |
| 4. 篠山城下町他（城下町等） | 5. 寺内付田の坪遺跡（生産遺跡） | 6. 遊谷城跡（城館跡）   |
| 6. ハノ坪遺跡（散布地）   | 7. 郡家宮東の坪遺跡（散布地）  | 8. 下小西の坪遺跡（集落） |
| 9. 藤井館跡（城館跡）    | 10. 東浜谷遺跡（集落）     | 11. 吹城跡（城跡）    |
| 12. 西吹城跡（城跡）    | 13. 網掛城跡（城跡）      | 14. 岩崎城跡（城跡）   |
| 15. 吹出城跡（城跡）    | 16. 岩崎城跡（城跡）      | 17. 谷山城跡（城跡）   |
| 18. 竜円寺遺跡（社寺跡）  |                   |                |

## 第3章 調査成果の概要

### 第1節 概要

調査区は主要地方道西脇篠山線の南側に平行する形で設定したが、調査対象範囲内に水路や道路等が存在するため掘削不可能な範囲が存在する。このような箇所を避けて調査区を設定したため、A地区からE地区までの合計5つの調査区に分割して調査を実施した。調査区名は西端の調査区をA地区とし、順にB・C・D・E地区とした。

遺構面はいずれの調査区においても2面存在する。上層を第1遺構面、下層を第2遺構面とした。上層の第1遺構面は現耕作土の直下で検出し、第2遺構面はそれより30cmないし40cm下方の非土壤層上面において検出した。

第1遺構面は近現代の搅乱に混じって中世の遺構を検出した。第2遺構面でも中世および律令期の遺構を検出した。しかし双方の遺構面で検出した中世の遺構・遺物にはあまり大きな年代の隔たりではなく、極めて短期間に、第1遺構面と第2遺構面の間の厚さだけ土砂が堆積し、そのうえで土壌化が進行したとは考えにくい。従って中世の遺構は第1遺構面で検出可能であったと考えられる。しかし、第1遺構面は耕土直下であるため遺構の検出が困難であり、そのため下層の第2遺構面で検出せざるを得なかつたものである。

### 第2節 A地区

第1遺構面では土坑・溝およびピットを検出した。土坑のうち遺物が出土したものはSK101・SK102・SK104・SK107である。溝はすべてA地区を南北に横断しているが、そのうち遺物が出土したのはSD104・SD105である。

第2遺構面でも土坑・溝およびピットを検出した。土坑のうち遺物が出土したものはSK221である。溝は2本検出しいずれもA地区を東西方向に継続している。そのうち遺物が出土したのはSD220である。SD220はその東側がB地区まで続いており、SD222として検出されている。

### 第3節 B地区

第1遺構面では掘立柱建物土坑・溝およびピットを検出した。土坑のうち遺物が出土したものはSK108・SK111・SK112・SK113・SK114・SK117・SK118である。このうちSK108およびSK112は遺構の平面形が不定形であることから、人為的に掘られた遺構というより、自然な地形的な落ち込みである可能性が高い。溝のうち遺物が出土したのはSD108である。またピットのうち遺物が出土したのはP.111・P.113・P.116・P.121・P.123である。

第2遺構面では土坑・溝・土器だまり・掘立柱建物およびピットを検出した。土坑のうち遺物が出土したものはSK222・SK224である。溝のうち遺物が出土したのはSD222である。この溝の西側はA地区に続いており、SD220として検出される。土器だまりはB地区東半部の北壁沿いに位置している。土師器の皿と杯がこの地点に集積されていた（写真図版8（下））が、土坑等の遺構は検出できなかった。掘立柱建物はSB201とSB202の2棟である。SB201は2間×2間以上の総柱の建物である。P.2101、

P.2105、P.2106、P.2110はSB201の柱穴である。SB202は2間×3間の総柱の建物である。柱穴から遺物は出土していない。掘立柱建物の柱穴の他に、遺物が出土しているピットはP.2113、P.2117、P.2119、P.2121である。

## 第4節 C地区

第1遺構面では溝およびピットを検出した。これらのうち遺物が出土した遺構はSD103である。

第2遺構面で検出した遺構は土坑（井戸を含む）・溝・掘立柱建物およびピットである。土坑等のうち遺物が出土したのはSK202・SK205・SK207・SK208・SK209・SK210である。このうちSK205およびSK210は井戸である。SK205は井戸側に曲物を利用して井戸戸で、SK210は素掘りの井戸である。溝のうち遺物が出土したのはSD201・SD203・SD205・SD206・SD208である。

掘立柱建物は1棟でSB203である。SB203は2間×4間の総柱の建物と考えられる。P.204・P.205・P.235はSB203の柱穴である。これらの柱穴以外に遺物が出土したピットはP.211・P.262・P.263である。

## 第5節 D地区

第1遺構面では遺構を検出することはできなかった。第2遺構面では溝とピットを1基ずつ検出した。

## 第6節 E地区

第1遺構面では土坑・溝・ピットを検出したが、遺物を検出していない。第2遺構面でも土坑・ピット等を検出したが、遺物は出土していない。

## 第4章 遺構

### 第1節 第1遺構面

#### ①土坑

SK101

A地区東端部に位置する、直径約1.5mの円形の土坑である。瓦器椀等が出土し図化した。

SK102

A地区東端部に位置する隅丸長方形の土坑である。全長2.1m、全幅1.6mである。瓦器椀が出土し図化した。

SK104

A地区中央部に位置する楕円形の土坑である。最大径は0.7mである。瓦器椀・皿および須恵器のこね鉢等が出土し図化した。

SK107

A地区東端部に位置する楕円形の土坑である。最大径は0.5mである。土師器皿と瓦器椀が出土した。

SK108

B地区西端部に位置する不定形の土坑である。土師器皿・杯、瓦器椀・皿および須恵器のこね鉢等が出土し図化した。

SK111

B地区西半部に位置する楕円形の土坑である。最大径は1.5mである。土師器皿・鍋と瓦器椀が出土したが図化はできなかった。

SK112

B地区西半部に位置する不定形の土坑である。瓦器椀が出土したが図化はできなかった。

SK113

B地区中央部に位置する楕円形の土坑である。最大径は2.3mある。陶器の鉢が出土したが図化はできなかった。

SK114

B地区中央部に位置する楕円形の土坑である。最大径は2.3mである。須恵器のこね鉢の他、染付の碗など近世の遺物が多く出土したが図化は実施していない。

SK115

B地区中央部に位置する楕円形の土坑である。最大径は2.2mである。染付碗など近世の遺物が多く出土した。図化はしていない。

SK117

B地区東端部に位置する長円形の土坑である。土師器杯、瓦器椀・皿、須恵器皿・杯等が出土し図化した。

SK118

B地区東端部に位置する土坑である。瓦器碗と須恵器のこね鉢が出土したが図化はできなかった。

## ②溝

### SD103

C地区西半部に位置する南北方向の溝である。幅0.4m、深さ0.05m足らずである。土師器皿と瓦器碗が出土したが図化はできなかった。

### SD104

A地区東半部に位置する南北方向の溝である。幅0.7m、深さ0.4mである。土師器皿、瓦器碗、須恵器杯等が出土し図化した。土師器鍋が出土したが図化はできなかった。

### SD105

A地区西半部に位置する南北方向の溝である。幅0.7m、深さ0.2mである。土師器杯と瓦器碗等が出土し図化した。

### SD108

B地区西端部に位置する東西方向のごく短い溝である。幅1.4m以上で深さは0.3mである。土師器皿・杯および瓦器碗が出土し図化した。

## 第2節 第2遺構面

### ①土坑（井戸）

#### SK202

C地区東半部のSB203の南側に隣接している。最大径1.5mの楕円形の土坑である。

#### SK205（井戸）

C地区東端近くに位置する井戸である。井戸には曲物を転用した2段の井戸側が設置されている。検出面から底までの深さは1.1m、掘り方の最大径は1.4mである。井戸側が設置された部分の径は、上段が0.6mで、下段が0.4mである。土師器皿および瓦器碗が出土したが図化はできなかった。

#### SK207

C地区東端近くに位置する楕円形の土坑である。最大径は1.1mである。瓦器碗が出土したが図化はできなかった。

#### SK208

C地区東端近くに位置する不定形の土坑である。瓦器碗が出土したが図化はできなかった。

#### SK209

C地区東端近くに位置する不定形の土坑である。土師器の皿・杯および瓦器碗等が出土し図化した。

#### SK210（井戸）

C地区東端部に位置する素掘りの井戸である。作業上の安全確保のため、底までの掘り抜きはできなかった。掘削した最大の深さは、遺構面から1.1mである。また掘り方の最大径は1.5mで、最小径は0.4mである。土師器皿・鍋、瓦器碗・皿、須恵器こね鉢等が出土し図化した。

#### SK221

A地区西端に位置する直径1.5mの円形土坑である。土師器皿・杯、瓦器碗、須恵器壺等が出土し図化した。

#### SK222

B地区中央部で検出した、最大径1.1mの楕円形土坑である。瓦器碗・皿が出土したが図化はできなかった。

#### SK224

C地区中央部で検出した、最大径2.6mの楕円形土坑である。須恵器杯と須恵器こね鉢が出土し、須恵器杯のみ図化した。

#### ②溝

##### SD201

C地区中央部に位置する南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.1mである。土師器鉢と瓦器椀・皿が出土したが図化はしなかった。

##### SD203

C地区東端部付近に位置する南北方向の溝である。土師器鍋、瓦器椀、須恵器杯が出土したが図化はしていない。

##### SD205

C地区東端部付近に位置する東西方向の溝である。土師器皿と瓦器椀が出土したが図化はしていない。

##### SD206

C地区東端部付近に位置する東西方向の溝である。SD205の南側に位置している。瓦器皿が出土し図化した。

##### SD208

C地区東端部付近に位置する南北方向の溝である。瓦器椀と土師器鍋が出土したが図化はしていない。

##### SD220・SD222

A地区からB地区を東西方向に横断する溝である。A地区側をSD220、B地区側をSD222とした。土師器の長胴形の壺や須恵器の杯など、律令期の遺物が出土し図化した。

#### ③土器だまり [写真図版8(下)]

B地区東半部の北壁沿いで検出した。土師器の皿と杯がこの地点に集積されていたが、土坑等の遺構の形では検出できなかった。

#### ④掘立柱建物

##### SB201

B地区西端部で検出した2間×2間以上の総柱の建物である。柱間は東西が2m、南北が2.4mである。P.2101、P.2105、P.2106、P.2110はSB201の柱穴である。

##### SB202

B地区西半部で検出した2間×3間の総柱の建物である。柱間は2~2.4mである。柱穴から遺物は出土していない。

##### SB203

C地区中央部で検出した2間×4間の総柱の建物と考えられる。柱間は東西が2~2.4m、南北は約3mである。P.204・P.205・P.235はSB203の柱穴である。

# 第5章 出土遺物

## 第1節 第1遺構面出土土器 (図版13および図版15)

### SK101出土土器 (図版13 No. 1~2)

瓦器椀2点(1・2)を図化した。

瓦器椀(1)は体部のみの破片で底部や高台は残っていない。体部の断面形はやや内湾している。見込みには平行線の暗文が施されている。体部内面にはミガキが隙間なく施されている。体部外面もミガキが密に施されている。また口縁部下方にはナデが二重に施されている。瓦器椀(2)は底部の破片である。高台は貼り付け高台で高さは8mm程度である。見込みには平行線の暗文が施されている。

### SK102出土土器 (図版13 No. 3)

瓦器椀1点(3)を図化した。瓦器椀(3)は底部の細片である。高台は貼り付け高台である。高さは8mmでやや外側に踏ん張るような形態を呈している。見込みの暗文は平行線である。

### SK104出土土器 (図版13 No. 4~7)

瓦器皿1点(4)、瓦器椀2点(5・6)と、須恵器のこね鉢1点(7)を図化した。

瓦器皿(4)は体部にヨコナデで仕上げられているが、ミガキの痕跡は明瞭には認められない。

瓦器椀(5)は体部のみの破片である。体部の断面形はやや内湾している。体部内面は横方向のミガキが隙間なく施されている。外面にはミガキの痕跡は認められない。瓦器椀(6)は底部の破片である。見込みに平行線の暗文が施されている。高台は高さが7mmで断面形は三角形である。

須恵器のこね鉢(7)は口縁～体部にかけての破片である。口縁部には片口が認められる。口縁端部は上方に折り返すように整形されている。また口縁端部付近に重ね焼きの痕跡が認められる。

### SK108出土土器 (図版13 No. 8~15)

土師器皿1点(8)、瓦器皿2点(9・10)、土師器杯1点(11)、瓦器椀3点(12・13・14)と、須恵器のこね鉢(15)を図化した。

土師器皿は底部に回転糸切りの痕跡が認められる。瓦器皿(9・10)はいずれも回転糸切りは認められず、底部は指ナデで調整されている。土師器杯(11)は底部の破片である。平らな底部の上方に、直線的に外反する体部がつくものと考えられる。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。

瓦器椀(12)は体部の破片である。表面は剥離しているため調整や暗文等は不明である。口縁部下方の外面には2段のヨコナデが施されている。瓦器椀(13)も器表面が磨滅しているため調整は不明瞭である。外面の口縁部下方のナデは1段だけである。高台は高さ5mmで断面形は三角形を呈している。器椀(14)は体部の破片である。断面形はやや内湾するが口縁部付近でやや上方に屈曲する。見込みには平行線の暗文が施される。体部内面には横方向のミガキが隙間なく施されているが、体部外面のミガキは不明瞭である。外面の口縁部下方のナデは1段だけである。須恵器のこね鉢は口縁部の破片である。口縁端部はやや直立気味に仕上げられている。

### SK117出土土器（図版13 №.16~24）

瓦器皿 2 点（16・17）、須恵器皿 1 点（18）、土師器杯 1 点（20）、須恵器杯 1 点（19）と、瓦器碗 4 点（21~24）を図化した。

瓦器皿（16・17）はいずれも完形品である。体部にミガキの明瞭な痕跡などは認められなかった。須恵器皿（18）はやや深めの皿である。底部に回転糸切りの痕跡が認められる。土師器杯（20）と須恵器杯（19）にも底部に回転糸切りの痕跡が認められる。土師器杯（20）は体部が内弯するやや浅いタイプで、須恵器杯（19）は体部が直線的に開くものである。

瓦器碗（21）は口縁から体部の破片である。体部の断面はやや内弯している。内面にはミガキの痕跡が隙間なく見られるのに対し、外面には認められない。瓦器碗（22）は高台がほぼ完全に残った破片である。器高が6.4cmとやや高めで、高台も1cmとやや高めである。器表面はかなり剥離しており、調整などは不明である。瓦器碗（23）は器高に比べて口径が大きめである。やはり器表面が剥離しており、調整は不明瞭である。瓦器碗（24）は、見込みには斜格子状の暗文が施されている。体部は内外面とも隙間のないミガキが施されている。口縁部外面は端部の下方を2段にわたってナデが施されている。

### SD104出土土器（図版13 №.25~31）

土師器皿 1 点（25）、瓦器皿 3 点（26~28）、瓦器碗 2 点（30・31）と、須恵器杯 1 点（29）を図化した。

土師器皿（25）はほぼ完形品で、底部に回転糸切りの痕跡が認められる。瓦器皿（26~28）は糸切りの痕跡は認められない。またミガキの痕跡も明瞭には認められない。

瓦器碗（30）は焼成は良好であるが炭素の吸着が少ないと、色調は灰色を呈している。口縁部の外側は2段のナデを施している。瓦器碗（31）は底部の破片である。内外面とも器表面が磨滅しているため調整や暗文は不明である。須恵器杯（29）は口縁から体部の破片である。体部の断面形は直線的であるがやや内弯する。口縁部に重ね焼きの痕跡が認められる。

### SD105出土土器（図版13 №.32~34）

土師器杯 1 点（32）と、瓦器碗 2 点（33・34）を図化した。

土師器杯（32）は平底の底部に直線的に開く体部が付く。底部に回転糸切りの痕跡が認められる。色調は灰白色で、焼成は非常に良好である。

瓦器碗（33・34）は、いずれも焼成は良好であるが炭素の吸着が少ないと、色調は呈している。器表面が磨滅しているため調整や暗文の形状は不明である。口縁部外面のナデはいずれも一段だけである。

### SD108出土土器（図版13 №.35~39）

土師器皿 1 点（35）、土師器杯 1 点（36）、瓦器碗 1 点（37）、須恵器壺 1 点（38）と、須恵器こね鉢 1 点（39）を図化した。

土師器皿（35）は広く平たい底部に短く直線的な体部がつく。底部に回転糸切りの痕跡が認められる。

土師器杯（36）は平たい底部に直線的に開く体部がつく。底部に回転糸切りの痕跡が認められる。

瓦器碗（37）は焼成は良好であるが炭素の吸着が少ないと、色調は灰色から灰白色を呈している。須恵器壺（38）は口縁部の破片である。短い口縁を外反させている。須恵器こね鉢（39）も口縁部の破片である。口縁端部を上方へつまみ上げるように折り曲げている。

#### P.116出土土器（図版13 No.40）

土師器鍋1点（40）を図化した。鍋は口縁から体部上半部の破片である。口縁部は直線的でやや外反する。口縁端部は外側に折り返す形で肥厚させられている。体部はタタキにより整形されている。

#### P.139出土土器（図版13 No.41）

土師器鍋1点（41）を図化した。鍋は口縁から体部上半部の破片である。口縁部は直線的でやや外反する。口縁端部は外側に折り曲げる形で肥厚させられている。体部はタタキにより整形されている。体部内面にはタタキにより整形した際の當て具の痕跡が認められる。口縁部外面のナデは1段のみ施されている。

#### 包含層1 出土土器（図版15 No.83～89）

いざれも第1遺構面検出時に出土した遺物である。瓦器碗4点（86～89）、土師器鍋（83）、土師器羽釜（84）と、須恵器甕（85）を図化した。

瓦器碗（86）は器表面の磨耗が進んでおり、調整等について詳細は不明である。体部は基本的に内弯しているが、成形時の指オサエの影響で一部がS字形に弯曲している。瓦器碗（87）も器表面の調整の観察が困難な遺物である。体部内面には横方向のミガキが施されているが、外面には認められない。瓦器碗（88）は口縁部から体部にかけての破片である。体部の断面形はやや内弯している。体部内面には横方向のミガキが隙間なく施されているが、体部外面には認められない。口縁部外面のナデは2段にわたって施されている。瓦器碗（89）は高台がいわゆるベタ高台である点が他の瓦器碗とは異なっている。磨耗が激しいものの高台裏面に回転糸切りの痕跡がわずかに認められる。

土師器鍋（83）は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部は断面形が直線的で、口縁端部はわずかに外側に肥厚されている。体部はほぼ球形であるが、体部上半部の断面形はやや直線的である。タタキにより成形されており、体部外面にタタキ板による平行線模様が無数に残されている。また内面にも同心円模様の當て具の痕跡が認められる。

土師器羽釜（84）は口縁部および鋤の部分の破片である。口縁部はやや内弯しており、表面はヨコナデで調整されている。鋤の直下にはタタキの痕跡が認められる。

須恵器甕（85）は口縁部の破片である。口縁部は強く外反しており、口縁端部は垂下させるように成形している。体部から口縁部にかけてタタキにより成形されており、口縁部にも部分的にタタキの痕跡が認められる。

## 第2節 第2遺構面出土土器（図版14および図版15）

#### SK210出土土器（図版14 No.42～51）

土師器皿1点（42）、瓦器皿4点（43～46）、瓦器碗3点（47～49）、土師器鍋1点（50）と、須恵器こね鉢1点（51）を図化した。

土師器皿（42）は平底に短く外反する体部が付く。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。瓦器皿（43～46）はいざれも焼成は良好であるが、特に44は炭素の吸着が少なく灰白色を呈している。また（46）は内面に重ね焼きの痕跡が認められる。いざれの皿も底部は指おさえ、体部は指ナデで調整されている。ミガキの痕跡は明瞭には認められない。

瓦器碗（47）は口縁部から高台までの破片である。体部の断面形はやや内弯し、体部内面のみミガキ

が隙間なく施されている。体部外面にミガキの痕跡は明瞭には認められない。見込みに施された暗文は×に○4つを組み合わせた文様である。口縁部外面のナデは1段のみである。またこの土器の特色として、高台が内外2重に配置されていることである。つまり、底部裏面に半径1.5cmの小さな高台と、半径3.3cmの大きな高台の二つが付けられている点である。このような二重の高台が付けられた瓦器椀は、当遺跡ではこの遺物より他には認められない。瓦器椀(48)も体部の断面形はやや内弯し、体部内面のみミガキが隙間なく施されている。体部外面にミガキの痕跡は明瞭には認められない。見込みの暗文はほぼ平行な線約12本を一筆書きしている。口縁部外面のナデは2段施されている。瓦器椀(49)は体部の断面形はやや内弯し、口縁端部がやや上方につまみ上げられるように成形されている。体部内面のみミガキが隙間なく施されている。体部外面にミガキの痕跡は明瞭には認められない。見込みには平行線状の暗文が施されている。また口縁部外面のナデは2段施されている。

土師器鍋(50)は口縁部の破片である。直線的に外反する口縁の端部は外側へ折り曲げるよう肥厚させられている。須恵器こね鉢(51)は口縁部の破片である。口縁端部は上方につまみ上げるように成形されている。また口縁端部付近に重ね焼きの痕跡が認められる。

#### SK209出土土器（図版14 №.52~53）

瓦器椀2点(52・53)を図化した。

瓦器椀(52)はほぼ完形品である。口径13.8cmに対し器高4.8cmと、やや浅めの器形を呈している。体部の断面形はやや内弯しており、体部内面にはミガキ調整が隙間なく施されている。体部外面下半部には指頭圧痕が多数存在する。体部上半部から口縁部にかけては2段のヨコナデが施されている。見込みの暗文はほぼ平行な線による模様が描かれている。

瓦器椀(53)も体部の断面形はやや内弯しており、体部内面にはミガキ調整が隙間なく施されている。見込みの暗文はほぼ平行な線による模様が描かれている。口縁部下方のヨコナデは1段だけである。

#### SK202出土土器（図版14 №.54）

瓦器椀1点(54)を図化した。器表面が摩滅しているため、調整方法の詳細は不明である。体部下半の断面形はやや内弯しているが、体部上半から口縁部にかけては直線的である。

#### SK224出土土器（図版14 №.55）

須恵器杯1点(55)を図化した。杯の底部は平底で回転糸切りの痕跡が認められる。また体部の断面形は直線的に開く形を呈している。

#### 土器だまり出土土器（図版14 №.56~62）

土師器皿5点(56~60)と土師器杯2点(61・62)を図化した。これらの遺物はすべて器表面が摩滅しているため、調整方法等について詳細は不明である。皿(59・60)と杯(61・62)は底部に回転糸切りの痕跡が認められる。

#### SK221出土土器（図版14 №.63~70）

土師器皿2点(63・64)、瓦器皿1点(65)、土師器杯2点(66・67)、瓦器椀2点(69・70)と、須恵器壺1点(68)を図化した。

土師器皿(63・64)はいずれも平底の上に短く直線的に開く体部が付く。底部には回転糸切りの痕跡

が認められる。瓦器皿（65）の体部は指おさえにより成形され、体部はヨコナデで調整されてる。ミガキの痕跡は明瞭には認められない。

土師器杯（66）はむしろ皿に近い器形である。平底の上にやや外反する体部がつく。底部および体部はナデ調整が施されている。土師器杯（67）は（66）よりも口径とも底径とも小さく、一般的な杯の器形である。平底の裏面には回転糸切りの痕跡が認められる。体部の断面形は直線的であるが、ヨコナデにより調整されている。また体部外面と底部内面を中心に媒が付着している。

須恵器甕（68）は口縁部から体部上半部の破片である。口縁部は強く外反しており、その端部は肥厚することなく平滑にナデで仕上げられている。体部はタキにより調整されており、体部内面に当て具の痕跡が残されている。

瓦器椀（69）は完形品である。見込みの暗文は約15本の平行線を一筆書きで書き込んでいる。体部の断面形はやや内湾しているが、その内面にはヨコ方向のミガキが隙間なく施されている。またこの土器の特色として、口縁部内面にタテの短いミガキが約12箇所施されている点である。つまり口縁端部付近の内面において、口縁とは垂直方向に、長さ約1cmのミガキの痕跡が、最も密なところでは1.3cm間隔で施されている。このタテ方向のミガキ痕は口縁部のあらゆる部位で認められているわけではないが、このミガキ痕が認められない場所は器表面の残存状態も良くないことから、当初は口縁部全体に等間隔で付けられていた可能性が高いと考えられる。なお、口縁部下方のヨコナデは1段だけである。

瓦器椀（70）も見込みの暗文は平行線文様である。体部内面にはミガキが隙間なく施されているが、外面のミガキは明瞭には認められない。口縁部外下方のナデは2段から3段施されている。

#### SD222出土土器（図版14 №.71～72）

土師器甕1点（71）と、須恵器の杯1点（72）を図化した。

土師器甕（71）は長胴形の体部に強く聞く口縁部が付く。口縁部の調整はヨコナデであるが、体部外面には縦方向のハケメが無数に残されている。

須恵器杯（72）はヘラ切りされた底部の上に、口縁部付近がやや外反する体部が付く。体部の調整は回転ナデである。SD222で出土した遺物は他の遺構のものとは異なり律令期のものである。当遺跡においては、律令期の遺物はP.2101の須恵器甕（80）や、包含層で出土した須恵器の稜椀（98）等が認められる。

#### SD206出土土器（図版14 №.73）

瓦器皿1点（73）を図化した。瓦器皿（73）の体部は指おさえにより成形され、体部はヨコナデで調整されている。ミガキの痕跡は明瞭には認められない。

#### P.2121出土土器（図版15 №.74～75）

瓦器椀1点（75）と、須恵器こね鉢1点（74）を図化した。

瓦器椀（75）は口縁から底部までの破片である。見込みの暗文は平行線を一筆書きで書き込んでいる。体部の断面形はやや内湾している。体部の内面には横方向のミガキが隙間なく施されてる。口縁部の下方にはヨコナデが2段にわたりて施されている。体部外面には指頭圧痕が無数に残されているが、明瞭なミガキの痕跡は認められない。また底部に貼り付けられた高台の高さは約8mmで、他の瓦器椀よりもやや高い目である。須恵器こね鉢（74）は口縁部の破片である。口縁端部は上方につまみ上げるように成形されている。

#### P.205出土土器（図版15 №.76～78）

瓦器碗1点(77)、土師器杯1点(78)と、土師器鍋1点(76)を図化した。

瓦器碗(77)は、見込みの暗文は平行線を一筆書きで書き込んでいる。断面形は底部から口縁部にかけて緩く内弯している。体部の内面には横方向のヘラミガキが隙間なく施されており、口縁部直下はヨコナデが施されている。同様のヘラミガキは体部外面上半部にも施されている。外面のヘラミガキが施された後、口縁部直下は2段にわたってヨコナデが施されている。また底部に貼り付けられた高台の高さは約9mmで、他の瓦器碗よりもやや高い目である。土師器杯(78)は体部上半部が内弯し、口縁端部はやや外反している。口縁端部には煤が付着している。

土師器鍋(76)は口縁部から体部上半部の破片である。口縁部は直線的でやや外側に開き、口縁端部を肥厚させている。体部はタクキで調整されており、外面には無数の平行線模様が残されている。また内面は当て具の痕跡が同心円模様となって残されている。

#### P.273出土土器（図版15 №.79）

瓦器皿(79)を1点図化した。瓦器皿(79)の底部は指おさえにより成形され、体部はヨコナデで調整されている。ミガキの痕跡は明瞭には認められない。

#### P.2101出土土器（図版15 №.80）

須恵器杯1点(80)を図化した。須恵器杯(80)も他の遺物とは時期的に異なり7世紀後半のものである。底部はやや丸みを帯びているもののほぼ平底で、ヘラ切りされた後はほとんど調整されていない。口縁部は外反している。

#### P.221出土土器（図版15 №.81）

瓦器碗1点(81)を図化した。瓦器碗(81)は口径15cmで他の瓦器碗よりもやや大きめである。断面形は底部から口縁部にかけて緩く内弯している。体部の内面には横方向のヘラミガキが隙間なく施されている。ヘラミガキの痕跡は体部外面上には認められない。

#### P.204出土土器（図版15 №.82）

瓦器碗1点(82)を図化した。焼成は良好であるが炭素の吸着が少ないと、器表面は灰白色を呈している。見込みの暗文は平行線文であるが一筆書きではない。体部内面には横方向のヘラミガキが施されているが、外面には施されていない。口縁部直下は2段にわたってヨコナデが施されている。

#### 包含層2 出土土器（図版15 №.90～101）

いずれも第2遺構面検出時に出土した遺物である。土師器皿3点(90～92)、瓦器皿2点(93・94)、瓦器碗2点(95・96)、須恵器杯1点(97)、須恵器稜輪1点(98)、須恵器こね鉢1点(99)と、土師器鍋2点(100・101)を図化した。

土師器皿3点(90～92)はいずれも体部はヨコナデにより調整されている。瓦器皿(93・94)はいずれの底部も指おさえにより成形され、体部はヨコナデで調整されている。ミガキの痕跡は明瞭には認められない。

瓦器碗(95)の暗文は平行線文を一筆書きしたものである。体部の断面形は内弯しており、体部内面には横方向のミガキが隙間なく施されている。体部外面には明瞭なミガキの痕跡は認められない。口縁

部外面のナデは1段のみ施されている。貼り付け高台の高さは約5mmで、他の瓦器椀と比べてやや低い目である。瓦器椀(96)の暗文も平行線文を一筆書きしたものである。体部の断面形は内湾しており、体部と口縁部の境目付近の厚みがやや厚くなっている。体部内面には横方向のミガキが隙間なく施されるが、外面には明瞭なミガキの痕跡は認められない。口縁端部外面のナデは1段のみ施される。

須恵器杯(97)は体部のみの破片である。底部は回転糸切りの平底であると考えられる。須恵器稜椀(98)は体部中位に稜を持ち、口縁部はやや外反している。須恵器こね鉢(99)の体部は直線的で、口縁端部は上方につまみあげるように成形されている。

土師器鍋(100・101)はいずれも横長の梢円形の体部の上方に、直線的な口縁部が付くものである。口縁部はヨコナデで調整されており、口縁端部は外側へ折り曲げるように肥厚されている。体部はタタキにより成形されており、タタキ板による平行線の圧痕が多数認められる。体部内面は板状の工具を用いて底部から口縁部方向にナデによる仕上げが施されている。

### 第3節 第2遺構面出土木器(図版16および図版17)

#### SK205出土木器(W1およびW2)

井戸側として用いられた二点の曲物である。これらは上下に積み上げられており、W1が上段、W2が下段に用いられていた。いずれも円形曲物で、底板や蓋板等ではなく側板だけの状態で検出した。両端が重なる部分は櫛皮を用いて綴じ合わせている。

W1は上段に用いられていたが、残存状況が悪く検出時には部分的に破損している箇所が多く、櫛皮による結合も既にはずれた状態であった。側板は厚さ約5mmの板材を用いた一重構造である点がW2と異なっている。内面に見られるケビキの痕跡は1~2cm間隔で縱方向に施されている。

W2は下段に用いられた曲物で、ほぼ完形の状態で検出した。側板は厚さ約5mmの板材を用いた内外二重構造になっている。二重の曲物のうち、内側の高さ約23cmの曲物が「芯」の役目を果たしている。この曲物の外側に、高さが各々約5cm、約8cm、約8cmの三つの曲物が、上下3段に巻き付けられたような状態を呈している。このように内側に一つ、外側に三つ、計四つのバーツとなる曲物が組み合わされて、W2の曲物が構成されている。また内面に見られるケビキの痕跡は縱方向で5~8mm間隔のものと、部分的に右上がりのものも認められる。

出土土器 法量表 (単位=cm)

No	種別	器種	出土遺構	口径	器高	腰径	底径
1	瓦器	椀	SK101	13.7			
2	瓦器	椀	SK101			6.7	
3	瓦器	椀	SK102			6.5	
4	瓦器	皿	SK104	8.1	1.3		
5	瓦器	椀	SK104	13.9			
6	瓦器	椀	SK104			7.5	
7	須恵器	こね鉢	SK104	26.6			
8	土師器	皿	SK108	7.9	1.3	6.1	
9	瓦器	皿	SK108	7.0	1.2	4.8	
10	瓦器	皿	SK108	8.1	1.2		
11	土師器	杯	SK108			8.1	
12	瓦器	椀	SK108	13.7			
13	瓦器	椀	SK108	13.9	5.5	7.1	
14	瓦器	椀	SK108	15.8	5.3		
15	須恵器	こね鉢	SK108	30.2			
16	瓦器	皿	SK117	8.3	2.0		
17	瓦器	皿	SK117	8.6	1.6		
18	須恵器	皿	SK117	8.3	2.2	4.2	
19	須恵器	杯	SK117			5.0	
20	土師器	杯	SK117	15.6	3.8	7.8	
21	瓦器	椀	SK117	11.9			
22	瓦器	椀	SK117	14.9	6.4	7.3	
23	瓦器	椀	SK117	15.7	4.9	7.2	
24	瓦器	椀	SK117	14.4	5.7	5.7	
25	土師器	皿	SD104	7.5	1.3	5.8	
26	瓦器	皿	SD104	7.4	1.6		
27	瓦器	皿	SD104	7.6	1.2		
28	瓦器	皿	SD104	8.0	1.7		
29	須恵器	杯	SD104	13.5			
30	瓦器	椀	SD104	12.0	6.0	5.7	
31	瓦器	椀	SD104			6.9	
32	土師器	杯	SD105	13.3	3.3	8.1	
33	瓦器	椀	SD105	14.2	5.6	7.4	
34	瓦器	椀	SD105	14.6	4.4	5.7	
35	土師器	皿	SD108	7.9	1.0	6.9	
36	土師器	杯	SD108	14.1	3.1		
37	瓦器	椀	SD108	13.9	3.8		
38	須恵器	壺	SD108	20.0	4.9		
39	須恵器	こね鉢	SD108	27.7	3.9		
40	土師器	鍋	pit116	21.2		22.7	
41	土師器	鍋	pit139	20.8			
42	土師器	皿	SK210	7.7	1.4		
43	瓦器	皿	SK210	7.1	1.6		
44	瓦器	皿	SK210	7.9	1.3		
45	瓦器	皿	SK210	7.8	1.5		
46	瓦器	皿	SK210	7.9	1.7		
47	瓦器	椀	SK210	14.1	5.2	6.4	
48	瓦器	椀	SK210	13.1	4.9	6.1	
49	瓦器	椀	SK210	14.4	4.8	7.0	
50	土師器	鍋	SK210	24.4	3.7		
51	須恵器	こね鉢	SK210	29.5	5.0		
52	瓦器	椀	SK209	13.8	4.8	6.1	
53	瓦器	椀	SK209	13.6	5.3	6.0	

No	種別	器種	出土遺構	口径	器高	腰径	底径
54	瓦器	椀	SK202	15.4	5.9		6.4
55	須恵器	杯	SK224	15.5	4.1		5.6
56	土師器	皿	土器だまり	8.2	1.3		5.1
57	土師器	皿	土器だまり	8.1	1.3		5.2
58	土師器	皿	土器だまり	8.3	1.0		5.5
59	土師器	皿	土器だまり	8.7	1.3		6.7
60	土師器	皿	土器だまり	8.9	1.4		7.0
61	土師器	杯	土器だまり	14.4	3.2		8.1
62	土師器	杯	土器だまり	14.7	3.3		8.4
63	土師器	皿	SK221	7.3	1.5		6.2
64	土師器	皿	SK221	8.0	1.5		7.0
65	瓦器	皿	SK221	8.1	1.8		
66	土師器	杯	SK221	14.2	2.2		8.3
67	土師器	杯	SK221	13.0	3.2		7.5
68	須恵器	壺	SK221	27.7			
69	瓦器	椀	SK221	13.6	5.1		6.2
70	瓦器	椀	SK221	13.9			
71	土師器	壺	SD222	27.9		24.3	
72	須恵器	杯	SD222	11.8	3.7		7.9
73	瓦器	皿	SD206	8.2			
74	須恵器	こね鉢	pit2121	36.0			
75	瓦器	椀	pit2121	14.9	6.0		6.0
76	土師器	鍋	pit205	22.9			23.9
77	瓦器	椀	pit205	14.1	5.2		6.5
78	土師器	杯	pit205	12.7			
79	瓦器	皿	pit273	7.8	1.2		6.2
80	須恵器	杯	pit2101	11.6	4.8		7.3
81	瓦器	椀	pit221	15.0	4.9		7.0
82	瓦器	椀	pit204	14.7	6.1		6.4
83	土師器	鍋	包含層1	22.9			27.6
84	土師器	羽釜	包含層1	37.4			
85	須恵器	壺	包含層1	48.4			
86	瓦器	椀	包含層1	13.2	5.1		6.9
87	瓦器	椀	包含層1	13.6	5.2		6.0
88	瓦器	椀	包含層1	13.3			
89	瓦器	皿	包含層1				6.3
90	土師器	皿	包含層2	8.6	1.2		
91	土師器	皿	包含層2	7.9	2.1		6.0
92	土師器	皿	包含層2	7.9	1.3		4.1
93	瓦器	皿	包含層2	7.2	1.8		
94	瓦器	皿	包含層2	7.3	1.6		
95	瓦器	椀	包含層2	12.4	4.6		5.2
96	瓦器	椀	包含層2	13.0	5.2		5.4
97	須恵器	杯	包含層2	14.8	4.0		
98	須恵器	碗	包含層2	17.2	5.8		10.4
99	須恵器	こね鉢	包含層2	29.0	8.3		
100	土師器	壺	包含層2	21.0	13.3	26.9	
101	土師器	壺	包含層2	20.5	18.7	25.2	

出土木器(曲物) 法量表 (単位=cm)

No	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径
W1	容器	曲物	SK205	67.1	22.6	66.0
W2	容器	曲物	SK205	49.2	23.6	48.3

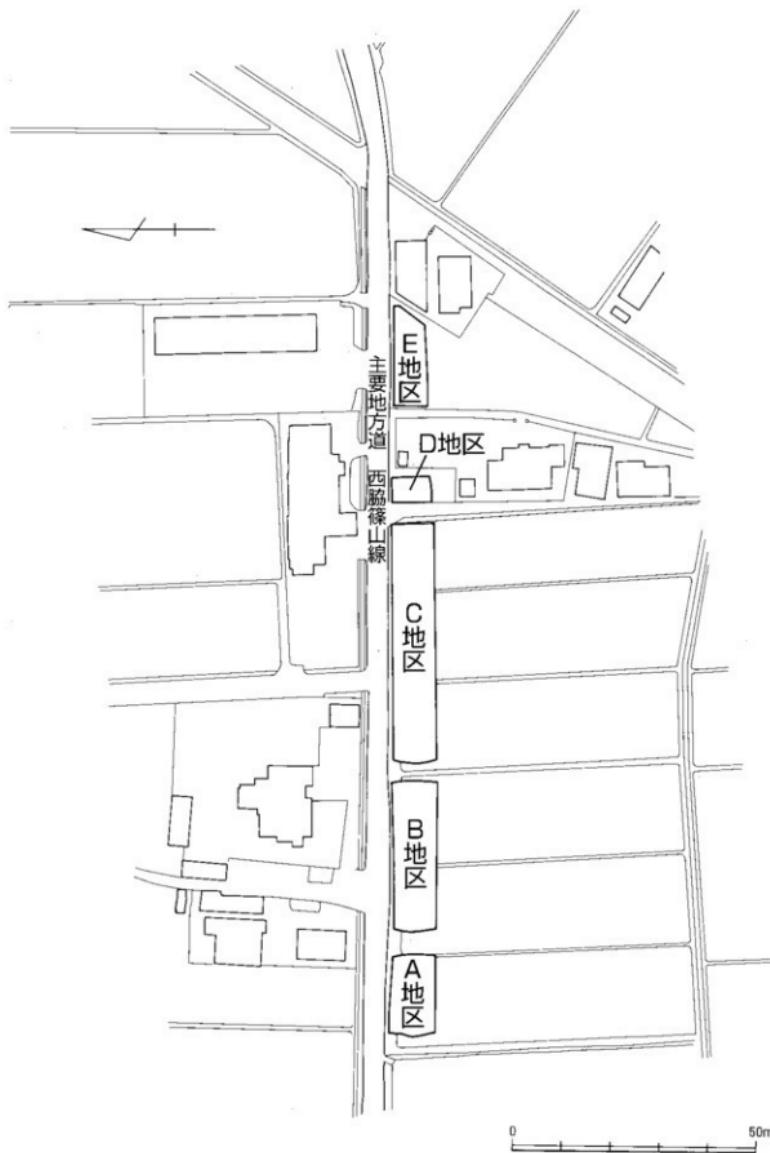
## 第6章 まとめ

- 東中道ノ坪遺跡は、平成10年度に兵庫県教育委員会が実施した。平成9年に実施された確認調査の結果、中世の集落遺跡であると確認された。全面調査の結果、これらの集落の一端を把握することができた。全面調査では遺構面を2面検出した。2面の遺構面の間には厚さ30cmないし40cmの土壌層が存在する。しかし双方の遺構面で検出した中世の遺構・遺物の年代差は、特に瓦器碗の形式差等から判断して、あまり大きな年代の隔たりがあるとは考えられず、また、極めて短期間に、第1遺構面と第2遺構面の間の厚さだけ土砂が堆積し、そのうえで土壤化が進行したとは考えにくい。従って遺構はすべて第1遺構面で検出可能であったと考えられる。しかし、第1遺構面は耕土直下で、耕作のため遺構面自体がかなり損傷を受けているため遺構の検出が困難であり、そのため第1遺構面で検出し切れなかった遺構を、下層の第2遺構面で検出せざるを得なかったものと考える。
- 第1遺構面、第2遺構面とともに、検出した遺構は掘立柱建物とそれに伴う柱穴、溝、土坑等である。第2遺構面では井戸も2基検出した。これらの事項の時期は、出土遺物のうち主に瓦器碗の型式から判断して、13世紀初頭から前半にかけてのものと考えられる。
- 出土遺物に関しては、土坑を中心とした遺構から丹波型瓦器碗の良好な一括資料を提示できたのではないか。出土した瓦器碗にはあまり大きな型式差は認められず、SK209で出土した52番の土器に代表されるように①平行線文様の暗文、②体部内面の隙間なく施されたヘラミガキ、③外面にはヘラミガキが施されない。以上の3点が特徴としてあげられる。丹波地域における中世土器の編年研究の成果としては伊野近富氏の論文があげられる（伊野1995年）。この論文の中の編年表に、当遺跡で上記の瓦器碗をあてはめるならばV期のなかに収まり、13世紀前半の絶対年代が与えられる。またP.273で出土した77番の土器のように外面のヘラミガキが省略されない土器についてはIV期の中に収まり、12世紀末から13世紀初頭の年代が与えられる。
- さらに複数の遺構〔特にSK108・SK210・SK221・SD104〕で丹波型瓦器碗が東播系須恵器と併存していることから、双方の編年案のすりあわせを行うのに良好な史料となりうるものである。また、旧多紀郡において、古代末から中世にかけての考古史料のうち公表されたものがまだ少ないとから、当面の間は当地域における13世紀代の土器（特に瓦器）の基準史料として利用されることを期待したい。

### （参考文献）

伊野近富「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報』第57号 1995年9月（財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター）

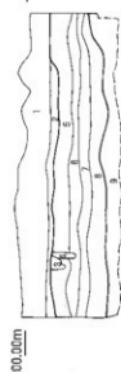
# 図 版



調査区配置図

## 図版2

A地区 南壁



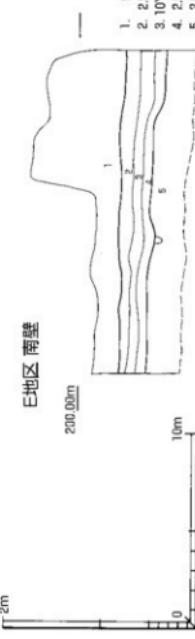
1. 2.5Y 4/2 陶成土 腐泥砂
2. 10YR 5/4 に高い腐泥 シルト質堆積砂
3. 10YR 5/3 に高い腐泥 粘土質堆積砂
4. 10YR 6/2 陶成土 シルト質堆積砂
5. 2.5YR 6/2 陶成土 粘土質堆積砂
6. 2.5Y 6/3 に低い腐泥 シルト質堆積砂
7. 10YR 6/3 に低い腐泥 シルト質堆積砂
8. 10YR 5/4 に低い腐泥 粘土質堆積砂
9. 2.5YR 6/1 黄灰 シルト質堆積砂

C地区 南壁



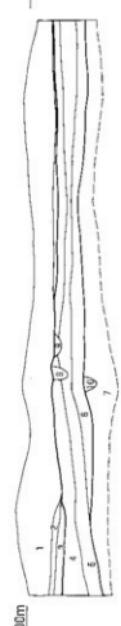
1. 2.5Y 4/2 陶成土 シルト質堆積砂
2. 10YR 5/6 黄灰 シルト質堆積砂
3. 10YR 6/4 に高い腐泥 シルト質堆積砂
4. 10YR 5/3 に高い腐泥 粘土質堆積砂
5. 10YR 5/2 陶成土 シルト質堆積砂
6. 10YR 5/3 (C) に高い腐泥 シルト質堆積砂
7. 10YR 4/3 (C) に高い腐泥 粘土質堆積砂

D地区 南壁



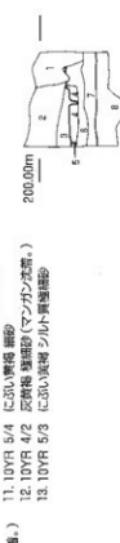
土層断面図（各調査区南壁）

B地区 南壁

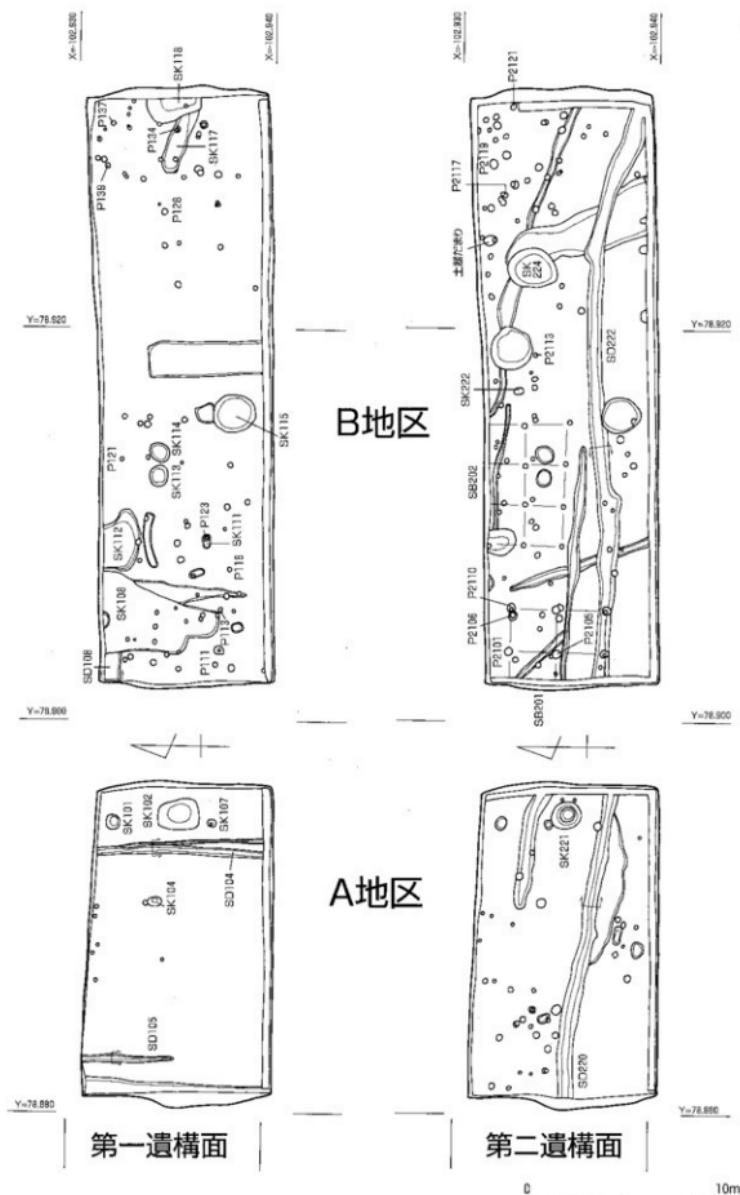


1. 2.5Y 4/2 陶成土 シルト質堆積砂
2. 10YR 6/4 に高い腐泥 シルト質堆積砂
3. 10YR 5/3 に高い腐泥 粘土質堆積砂
4. 10YR 6/2 陶成土 シルト質堆積砂
5. 2.5YR 6/2 陶成土 粘土質堆積砂
6. 2.5Y 6/3 に低い腐泥 シルト質堆積砂
7. 10YR 5/6 黄灰 シルト質堆積砂
8. 10YR 5/2 陶成土 シルト質堆積砂
9. 10YR 5/1 陶成土 シルト質堆積砂
10. 10YR 6/1 黄灰 シルト質堆積砂
11. 10YR 5/4 (C) に高い腐泥 粘土質堆積砂
12. 10YR 4/2 陶成土 粘土質堆積砂 (マングンガニ層)
13. 10YR 5/3 (C) に高い腐泥 シルト質堆積砂

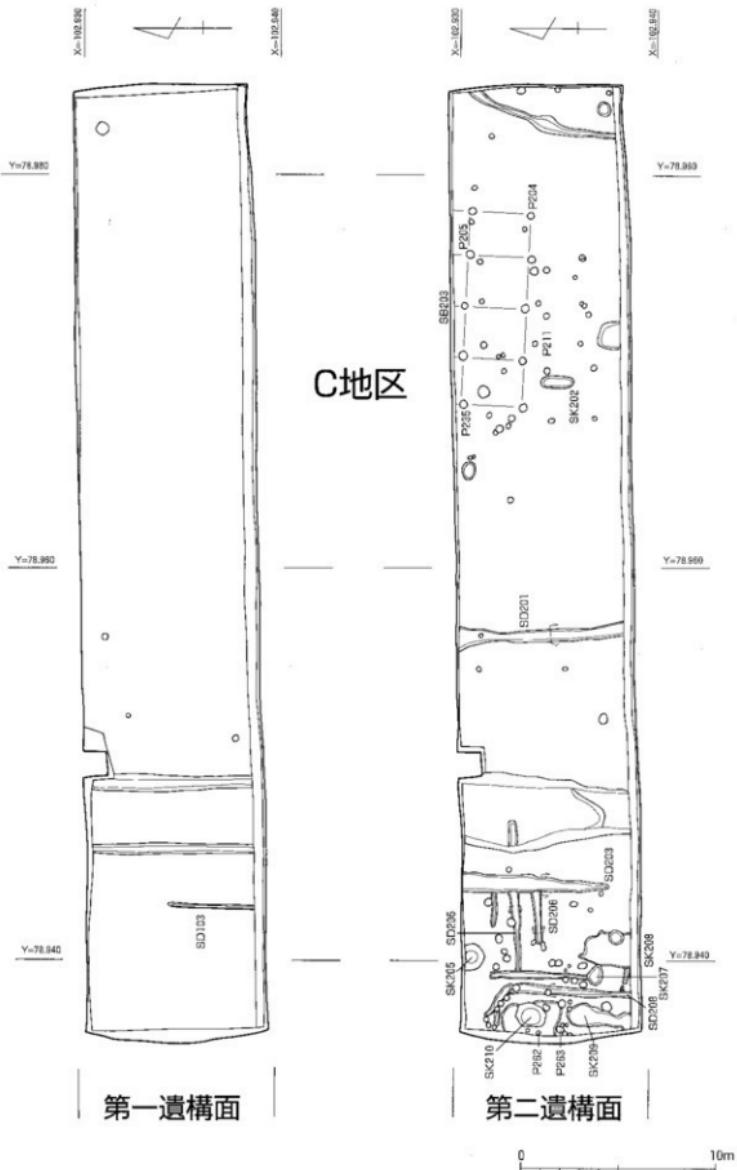
D地区 南壁



1. 2.5Y 4/2 陶成土 (細い牛糞)
2. 10YR 4/2 陶成土 粘土
3. 10YR 5/3 に高い腐泥 粘土 (マングンガニ層)
4. 10YR 5/3 に高い腐泥 シルト質堆積砂
5. 10YR 5/2 陶成土 シルト質堆積砂
6. 10YR 5/2 陶成土 粘土質堆積砂
7. 10YR 5/4 陶成土 粘土
8. 10YR 5/3 に高い腐泥 シルト質堆積砂 (マングンガニ層)

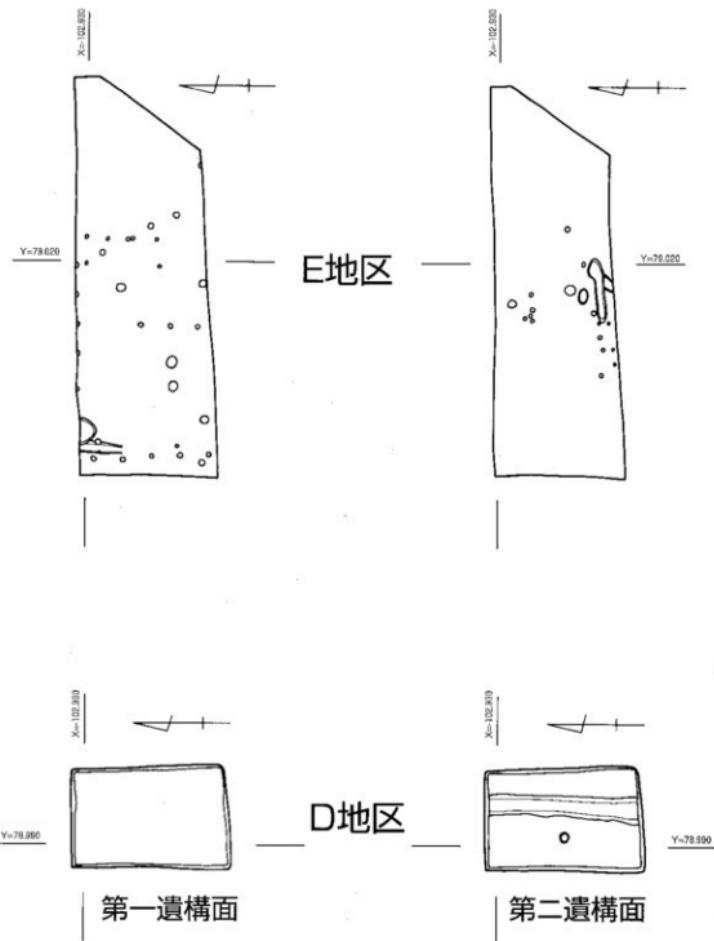


# 図版4



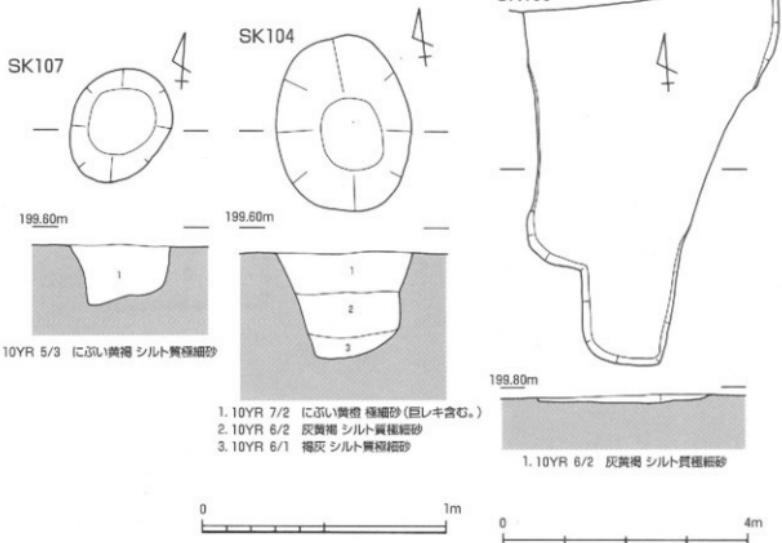
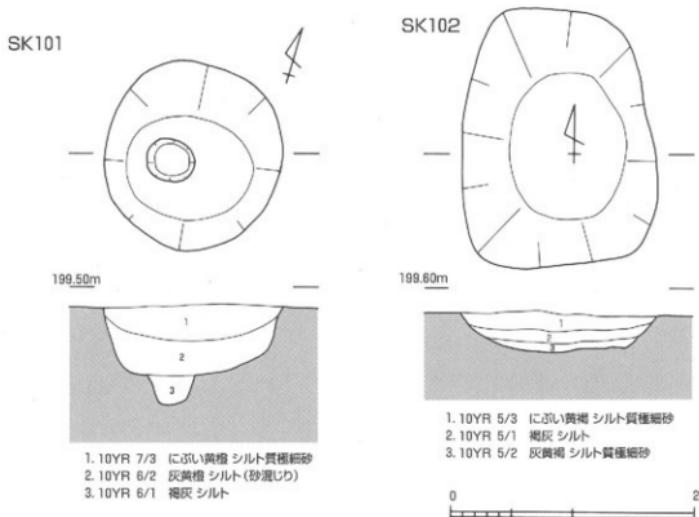
C地区 全体図

図版5

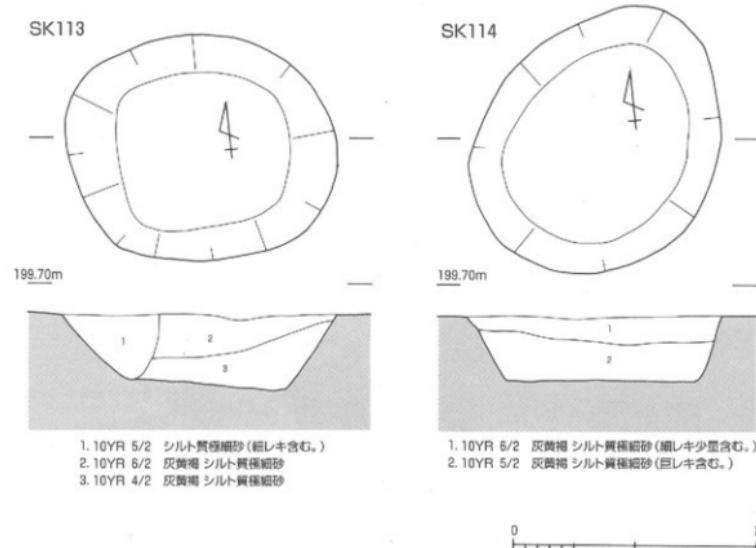
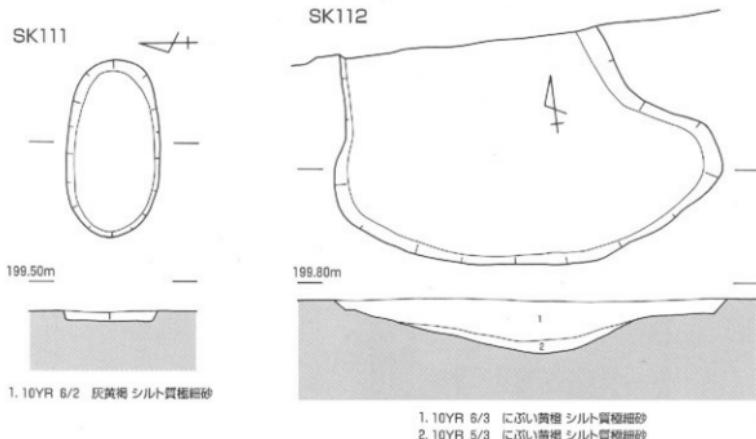


D・E地区 全体図

## 図版6



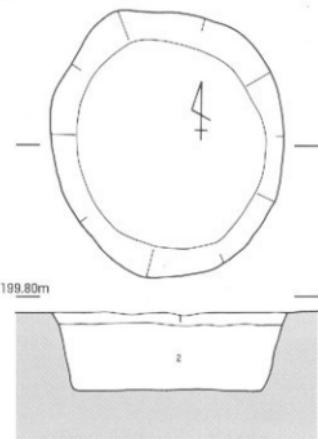
遺構図（第1遺構面 土坑）



遺構図（第1遺構面 土坑）

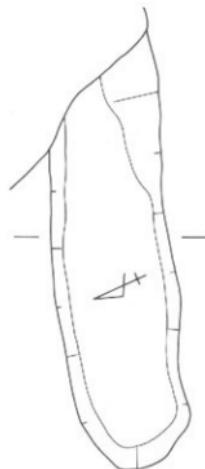
# 図版8

SK115

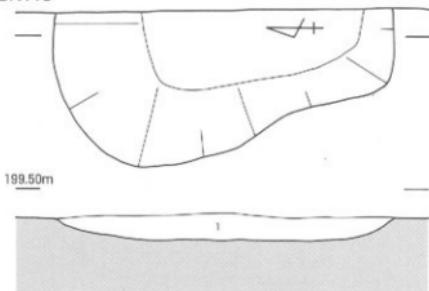


1. 10YR 6/1 黄灰 シルト質極細砂（細レキ少量含む。）  
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂（中レキ多量に含む。）

SK117



SK118



1. 10YR 5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂

199.50m

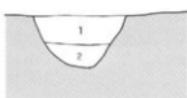
1. 10YR 6/2 灰黄褐 シルト質極細砂

SD103



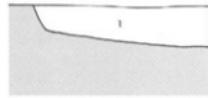
1. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト質極細砂

SD104



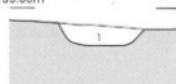
1. 10YR 6/2 灰黄褐 シルト質極細砂  
2. 10YR 7/1 灰白 シルト

SD108



1. 2.5Y 5/1 黄灰 シルト質極細砂

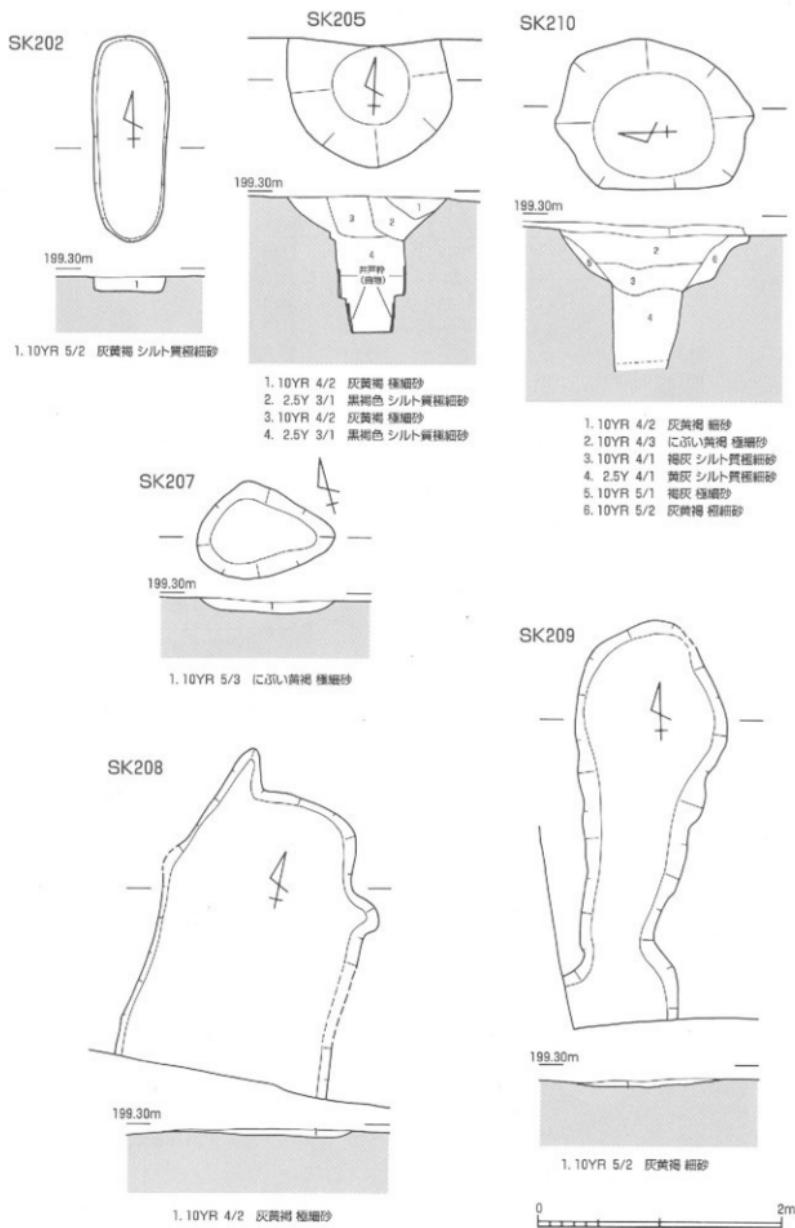
SD105



1. 10YR 6/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂

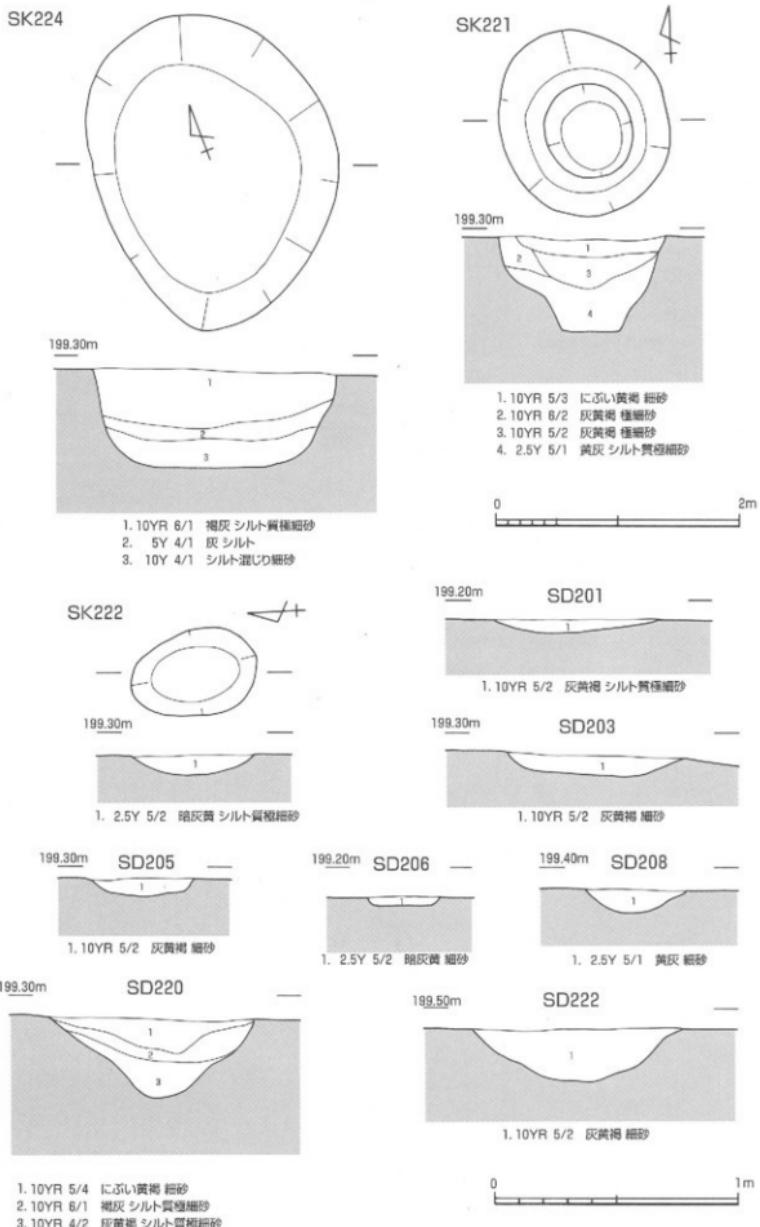


遺構図（第1遺構面 土坑、溝）



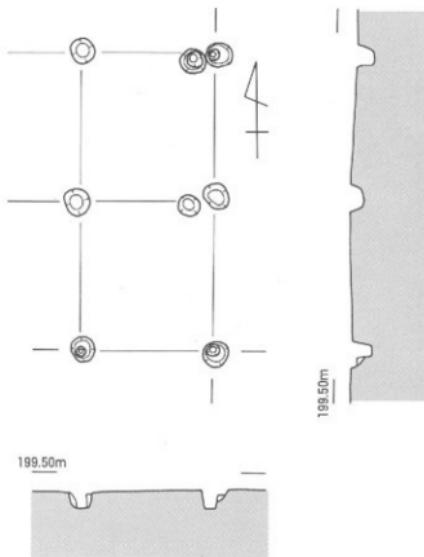
遺構図（第2遺構面 土坑）

## 図版10

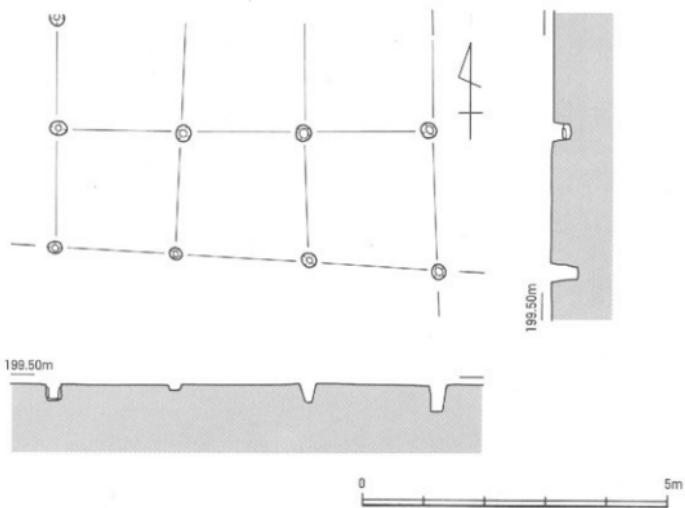


遺構図（第2遺構面 土坑、溝）

SB201



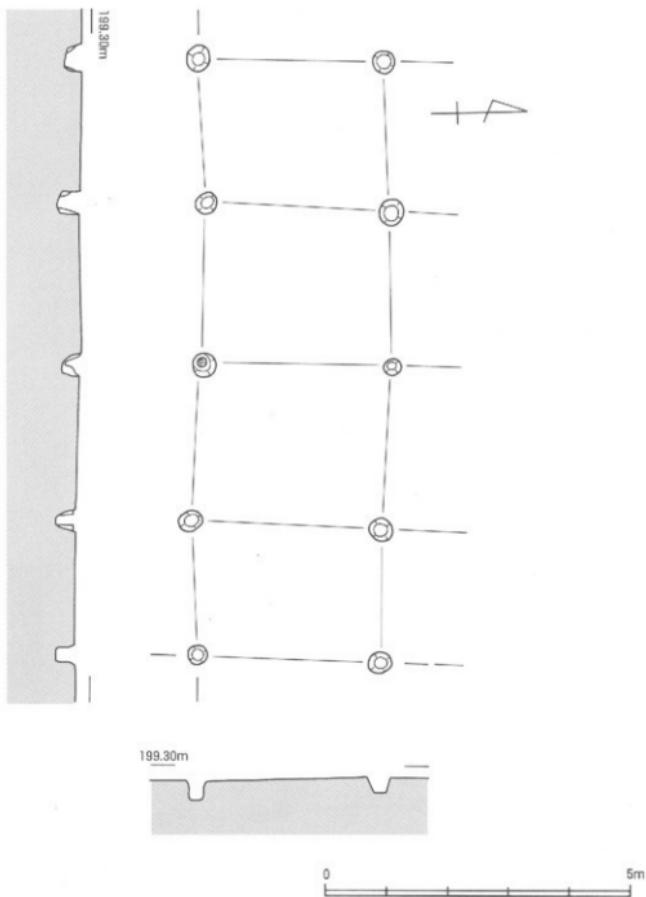
SB202



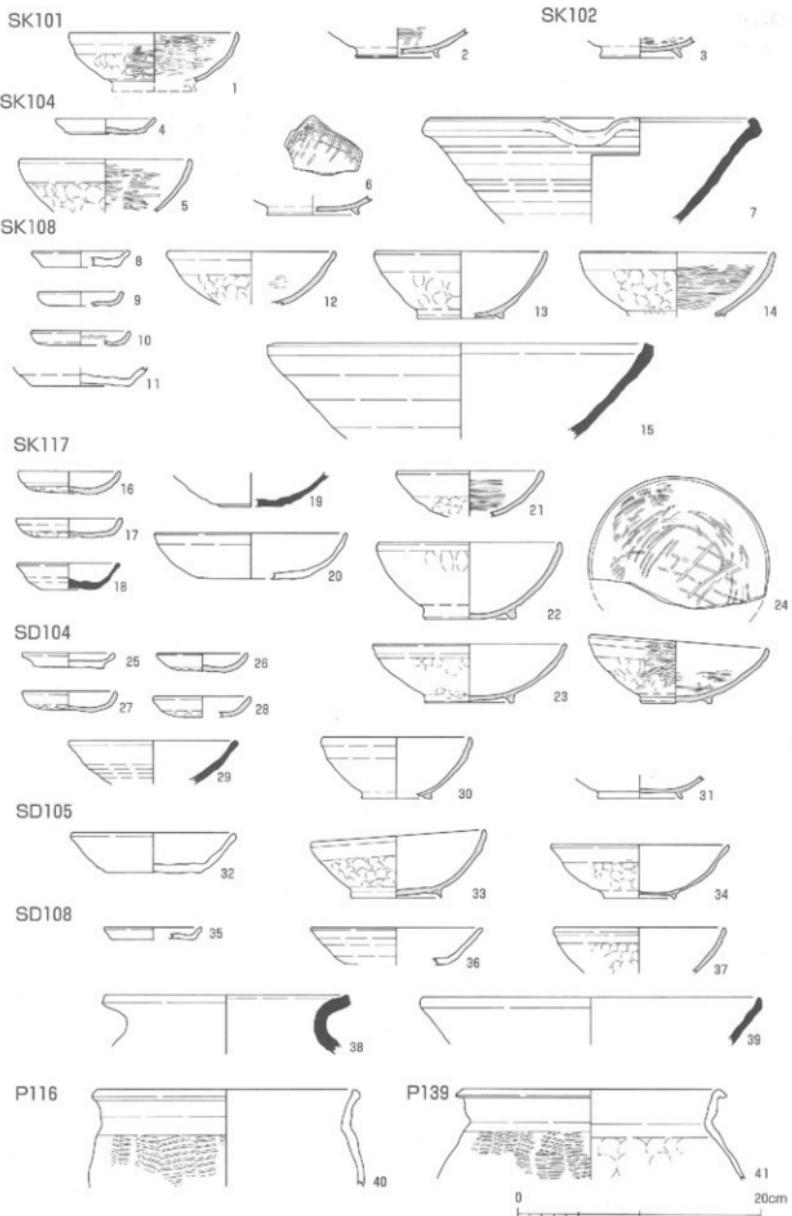
遺構図（第2遺構面 掘立柱建物）

## 図版12

SB203



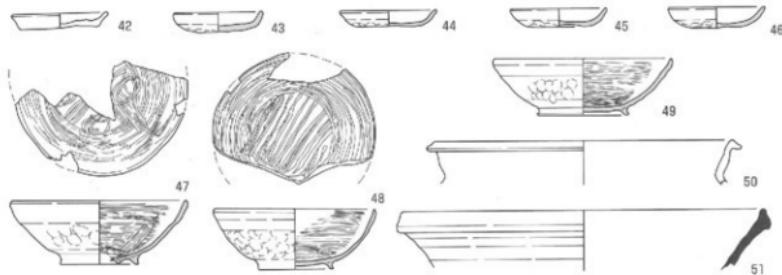
遺構図（第2遺構面　掘立柱建物）



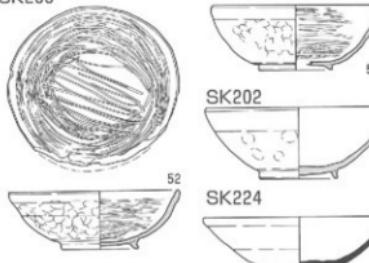
土器（第1遺構面 土坑、溝、柱穴）

# 図版14

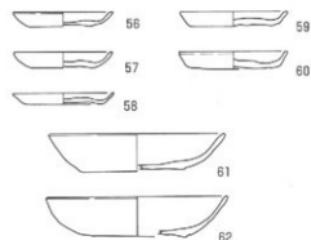
SK210



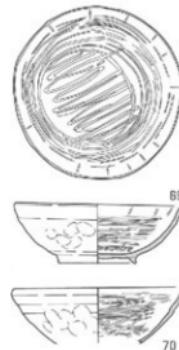
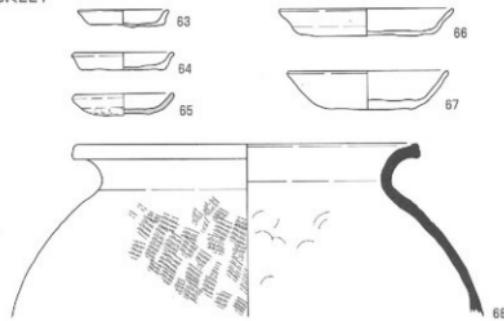
SK209



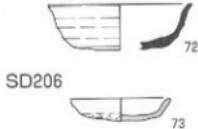
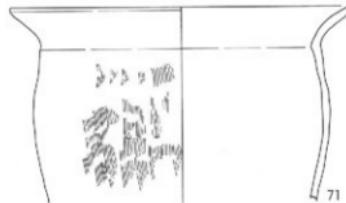
土器だまり



SK221



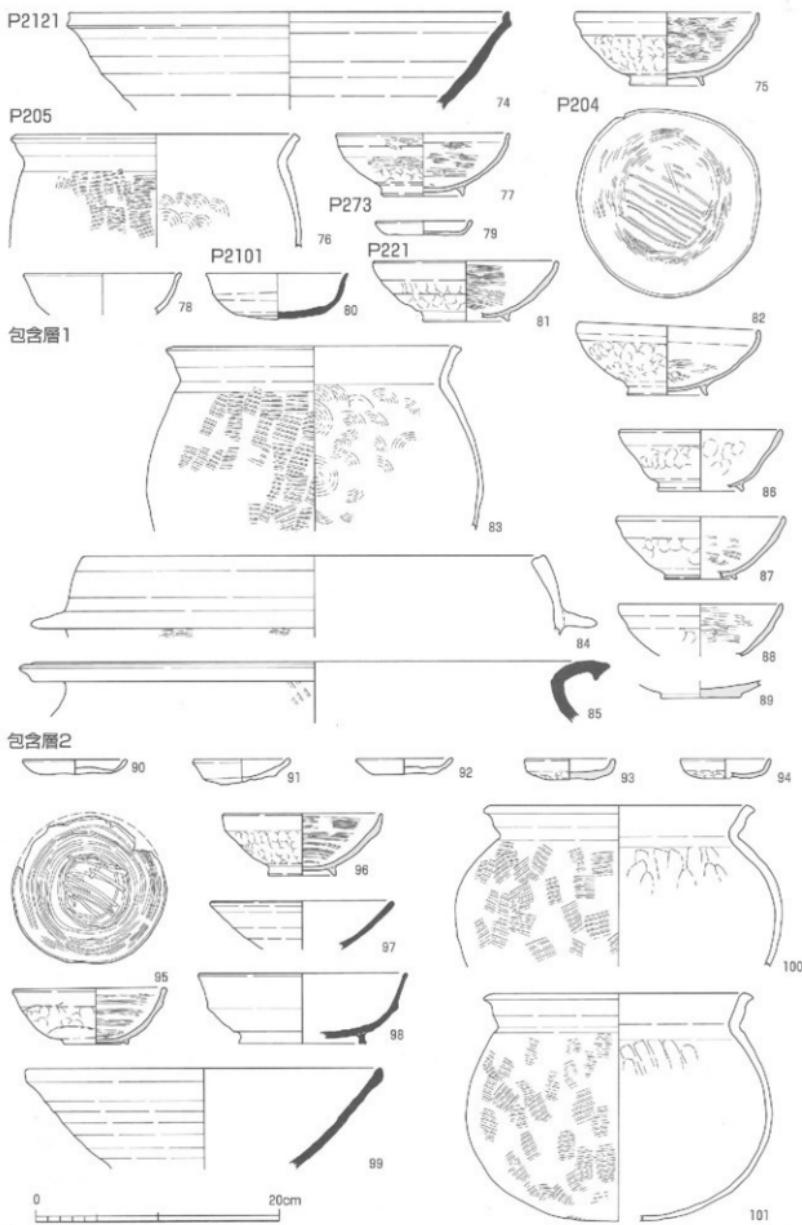
SD222



SD206



土器（第2遺構面 土坑、溝等）

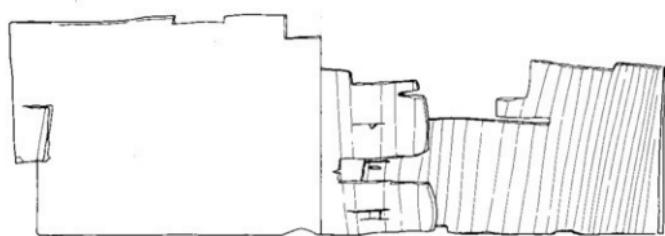


土器（第1遺構面 包含層 第2遺構面 柱穴および包含層）

図版16



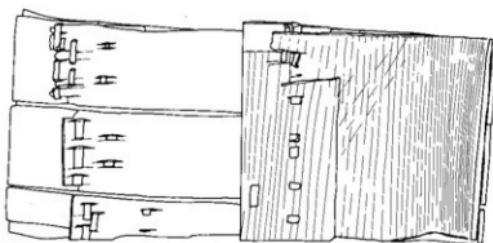
W1



SK205出土曲物（上段）

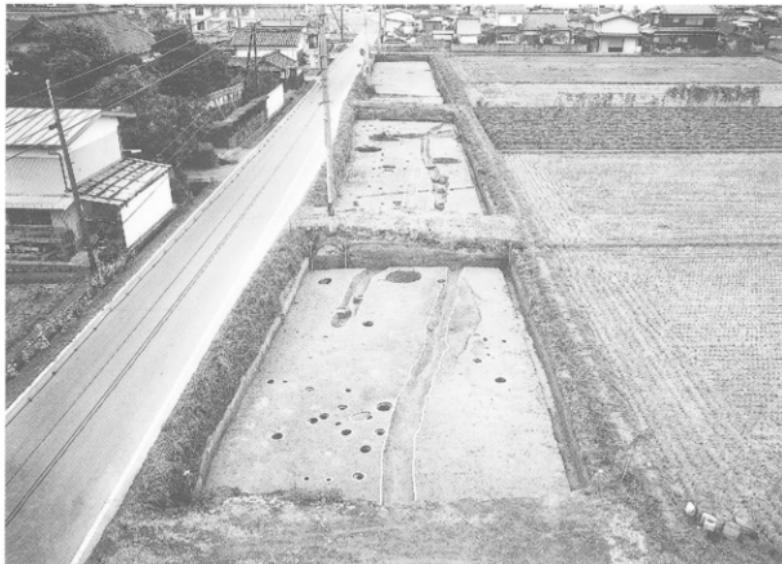


W2



SK205出土曲物（下段）

# 写真図版



A～D地区、第2遺構面全景（西から）

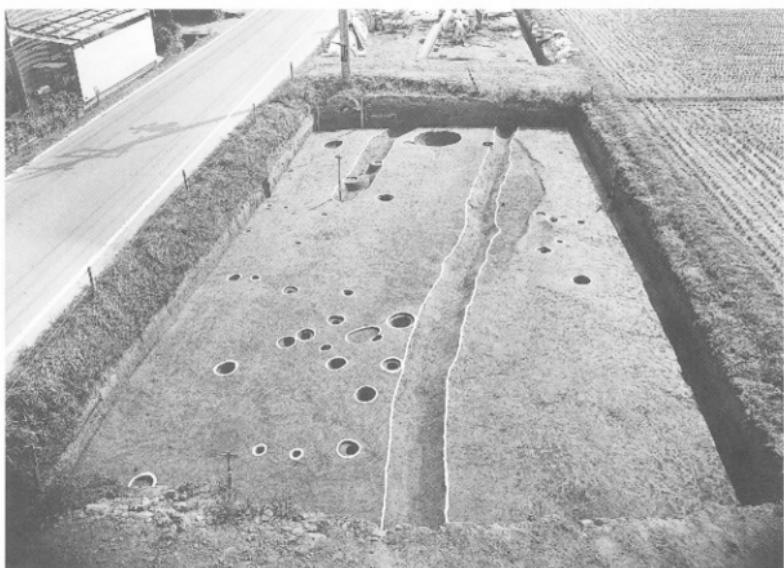


A～D地区、第2遺構面全景（東から）

## 写真図版2



A地区、第1遺構面全景（西から）



A地区、第2遺構面全景（西から）



B地区、第1遺構面全景（西から）



B地区、第2遺構面全景（東から）

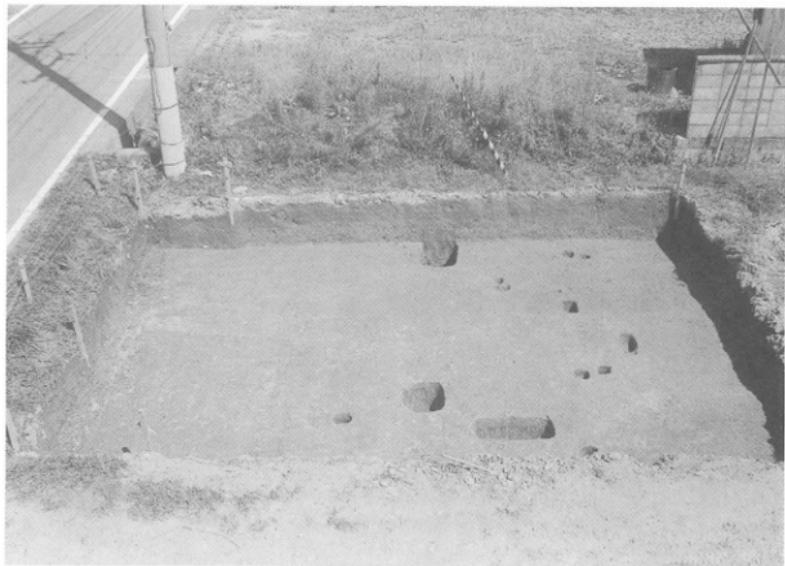
## 写真図版4



C地区、第1遺構面全景（西から）



C地区、第2遺構面全景（東から）

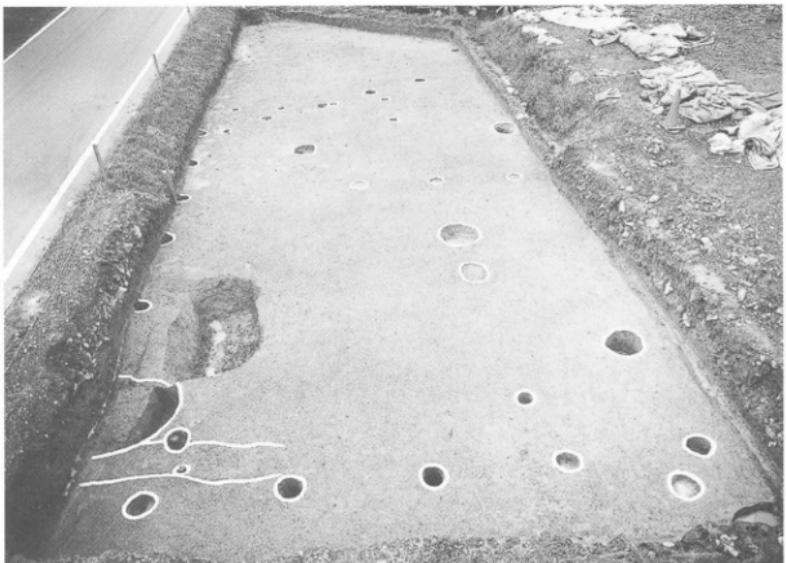


D地区、第1遺構面全景（西から）



D地区、第2遺構面全景（西から）

## 写真図版6



E地区、第1構造面全景（西から）



E地区、第2構造面全景（西から）



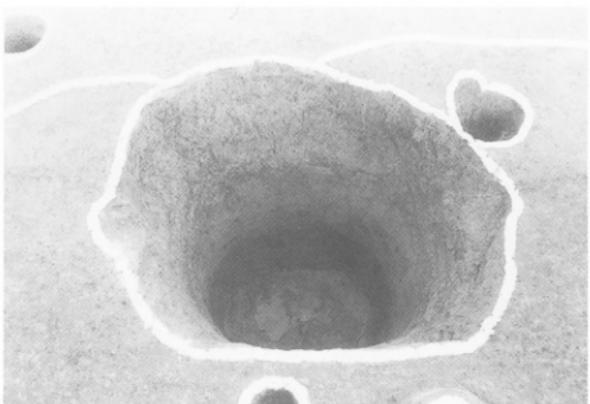
C地区西端部、遺構検出状況（東から）



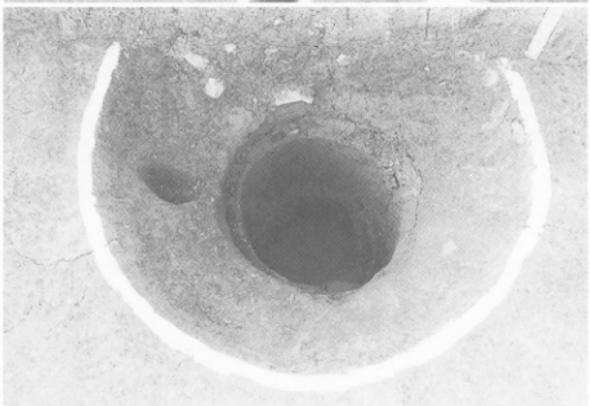
SB203、全景（東から）

## 写真図版8

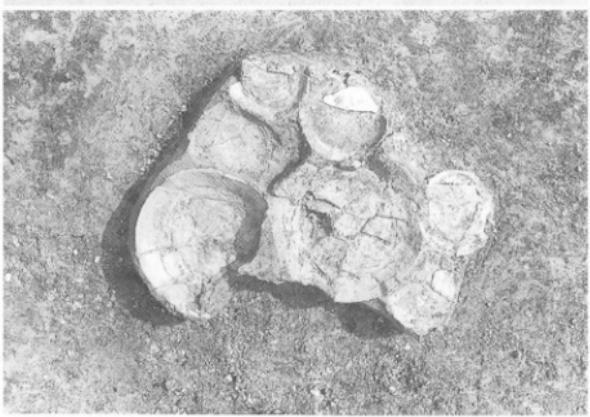
C 地区第2遺構面  
SK210  
(西から)

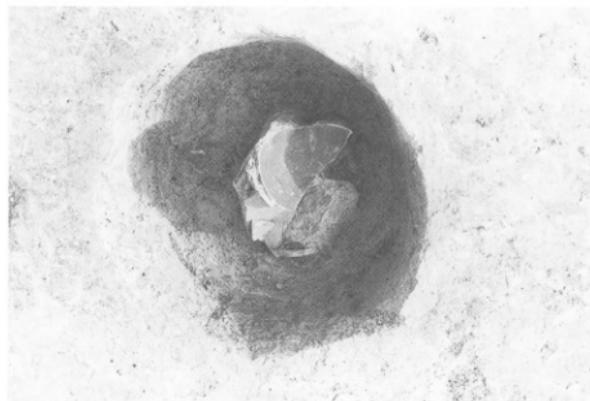


C 地区第2遺構面  
SK205  
(南から)

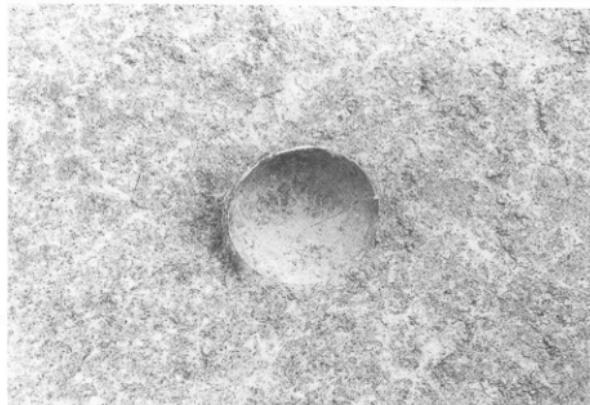


B 地区第2遺構面  
土器だまり  
(南から)





B 地区第2遺構面  
P211  
土器検出状況  
(南から)



C 地区第2遺構面  
SK202  
土器検出状況  
(南西から)



C 地区第2遺構面  
SK209  
土器検出状況  
(南から)

# 写真図版10



4



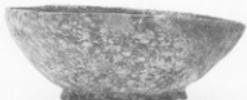
16



17



24



33



25



26



27



42



43



44



45



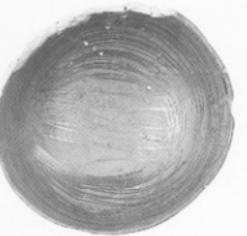
46



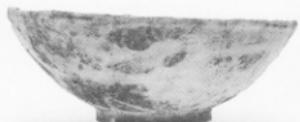
48



52



47



54



55



56



57



59



61



62



63



64



65



67



68



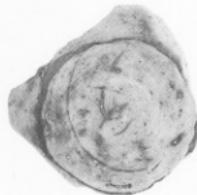
69



73

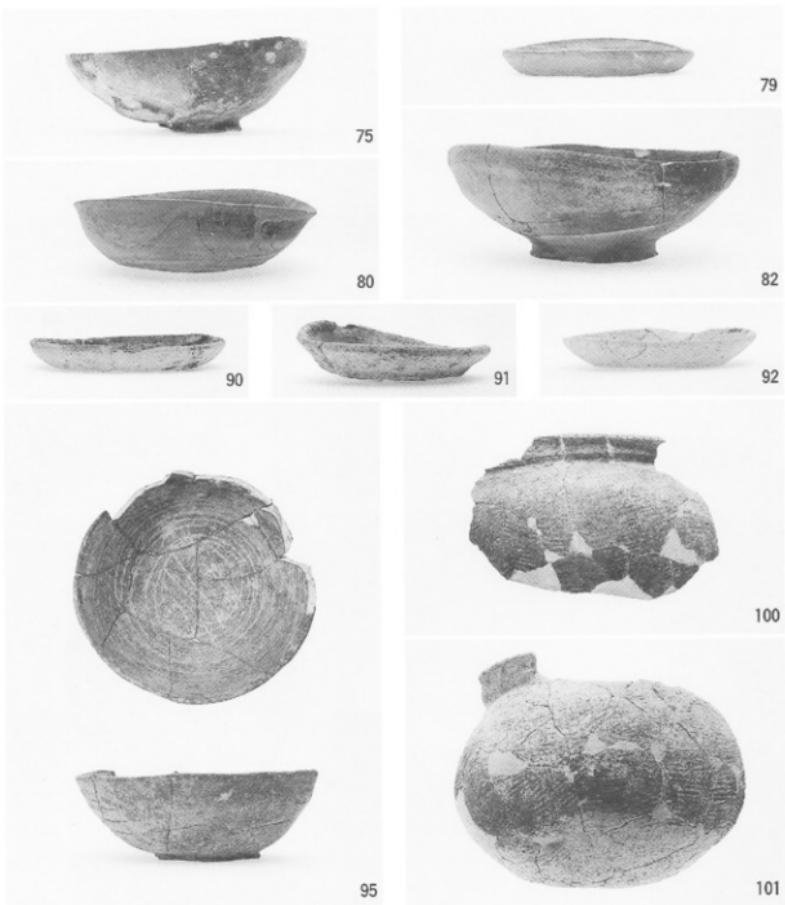


83

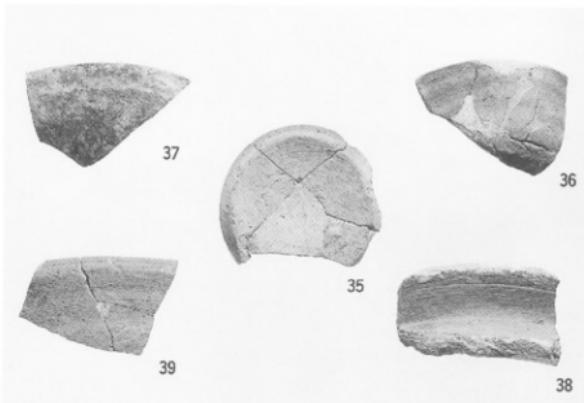


89

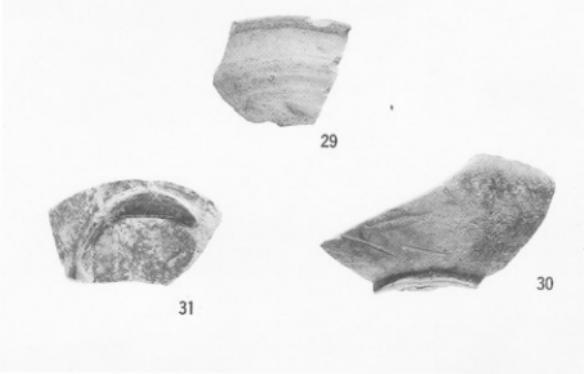
## 写真図版12



SD108出土土器



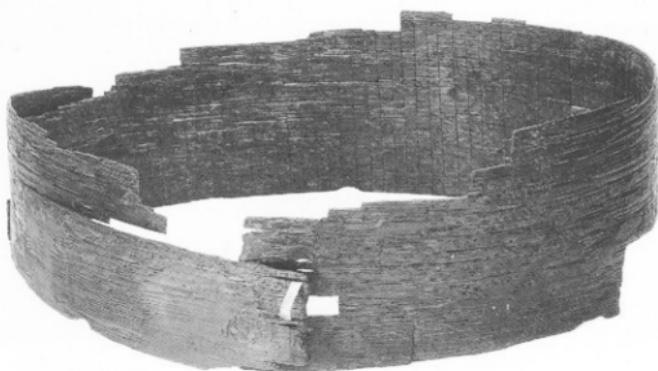
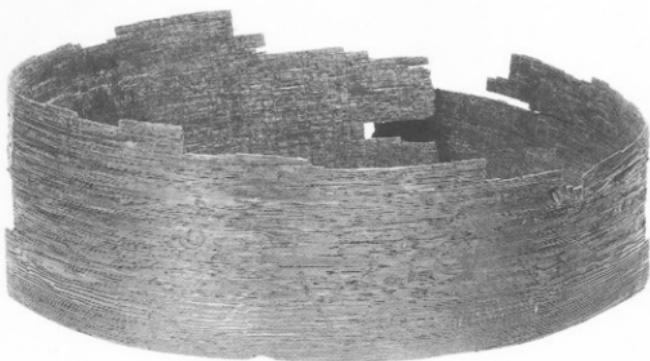
SD104出土土器



SD222出土土器



写真図版14



SD205出土 井戸側転用曲物（上段）



SD205出土 井戸側転用曲物（下段）

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしなかみらのつほ いせき
書名	東中道ノ坪遺跡
副書名	(主) 西脇篠山線緊急地方道整備事業に伴う発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第249冊
編著者名	鈴木 敬二
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 電話 078-531-7011
発行年月日	西暦2002年(平成14年)12月27日

所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市	町村					
ひがしなかみら のつほ 東中道 ノ坪遺跡	ひょう こ けんさくやまし 兵庫県篠山市 ひがしなかみら 東次	286665	980111	35度 04分 08秒	134度 11分 56秒	全面調査 1998.8.11～ 1998.10.22	981m <sup>2</sup>	(主) 西脇篠 山線緊急地 方道整備事 業に伴う事 前調査
所収遺跡名		種別	主な時代	主な以降		主な遺物	特記事項	
東中道ノ坪		集落跡	中世	掘立柱建物・井戸・溝・土坑		土器(瓦器・須恵器) 木器(曲物)		

---

兵庫県文化財調査報告 第249冊

篠山市

## 東中道ノ坪遺跡

(主)西脇篠山線緊急地方道整備事業に伴う発掘調査報告書

平成14年12月27日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒川町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39

---